

令和 6 年度

第31回

世田谷区小学生海外派遣事業 報告書

(オーストラリア・オーストリア)

世 田 谷 区 教 育 委 員 会

目 次

1 小学生海外派遣事業について	・・・ 2
2 あいさつ	
世田谷区教育委員会 教育長 知久 孝之	・・・ 3
3 将来につながる宝の思い出、学び	
オーストラリア派遣団 団長 野々村 剛	・・・ 4
4 蒔かれた種を大切に	
オーストラリア派遣団 団長 赤司 祐介	・・・ 5
5 小学生海外派遣団	・・・ 6
6 学習会等日程表	・・・ 7
7 オーストラリア団 報告	・・・ 9
(1) バンバリー市について	・・・ 10
(2) 日程表	・・・ 11
(3) 写真	・・・ 12
(4) 児童・引率報告書	・・・ 14
8 オーストラリア団 報告	・・・ 35
(1) ウィーン市 ドゥブリング区について	・・・ 36
(2) 日程表	・・・ 37
(3) 写真	・・・ 38
(4) 児童・引率報告書	・・・ 40

1 小学生海外派遣事業について

1 目的

- (1) 海外派遣小学生として、訪問国の生活及び文化や伝統について自分の目で確かめ肌で体験し、国際的視野を広める。
- (2) 外国で生活する人々や現地校の子どもたちとふれあい、人々の生活や文化に対する理解を深める。
- (3) 海外派遣を機会に、生活習慣の違いや日本の文化・伝統を見つめ直し、外国との違いに対する視野を広める。

2 令和6年度 事業概要

(1) オーストラリア団

- ◆ 日程：令和6年10月31日（木）～11月8日（金）
- ◆ 団員：統一公募の選考を通過した、区立小学校第5学年
- ◆ 派遣先：オーストラリア パース市、バンバリー市
- ◆ 人数：16名
- ◆ 内容：①学校訪問及び現地小学生、地域住民との交流
②訪問国での自然、産業、文化、歴史等の学習
③市長表敬
④訪問国でのホームステイ

(2) オーストリア団

- ◆ 日程：令和6年10月19日（土）～10月26日（土）
- ◆ 団員：統一公募の選考を通過した、区立小学校第5学年
- ◆ 派遣先：オーストリア ザルツブルク市、ウィーン市ドゥブリング区
- ◆ 人数：16名
- ◆ 内容：①学校訪問及び現地小学生との交流
②訪問国での自然、産業、文化、歴史等の学習
③区長表敬

2 あ い さ つ

世田谷区教育委員会 教育長 知久 孝之

世田谷区では、あらゆる国や地域の人々との交流や多様な文化に触れる機会を通して、語学力のみならず、相互理解や価値想像力、社会貢献意識などを高め、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、地球規模の視野をもち、グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成を図っています。

国外における事業はコロナウイルス感染症の影響により令和2年度～令和4年度まで中断を余儀なくされておりましたが、令和5年度より、姉妹都市提携を結んでいる西オーストラリア州バンバリー市、そしてオーストリアのウィーン市ドゥブリング区の2都市との交流事業を再開させることができました。

今回、公募により多数の応募者の中から選抜された区立小学校5年生の代表児童は、バンバリー市やウィーン市ドゥブリング区を訪れるにあたり、自分が興味を持った研究テーマを設定して事前・現地・事後の学習を通じて探究的な学びを体験することができました。今後、美しいインド洋に面した豊かな自然や世界に誇る芸術文化に触れ学んだ経験を一人でも多くの方に伝えることで更に高次の学びへと昇華させ、これからの人生を自分らしく豊かに生きる糧とすることを期待しています。

また、派遣先では、表敬訪問のほか、現地学校での交流やホームステイ体験など、バンバリー市およびドゥブリング区のみなさんから温かい歓迎を受けたと聞いています。この現地でしか得られない貴重な経験を活かし、これからの国際社会で国籍や文化、言語の違い等に関わらず多様性を認め合い誰もが平和的に暮らせる社会の構築のために活躍していくことを強く願っています。

結びに、この海外派遣に際し、多大なるご協力をいただきましたバンバリー市のミゲル市長、ウィーン市ドゥブリング区のレッシュ区長、日程等の調整にご協力をいただいた姉妹都市委員会や現地担当者の皆様、訪問を受け入れていただいた現地校の校長先生をはじめとする関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。また、代表児童の派遣にご理解、ご協力を賜りました保護者の皆様及び小学校校長会、各小学校の先生方、そして引率の先生方に深く感謝申し上げます、あいさついたします。



3

将来につながる宝の思い出、学び

オーストラリア派遣団 団長 希望丘小学校 校長 野々村 剛

今年で31回目を迎えた世田谷区立小学生海外派遣事業。この度、私はオーストラリア団の団長の任命を拝し、10月31日から11月8日まで、区内16名の5年生代表児童と共に、姉妹都市バンバリー市へ同行させて頂きました。西オーストラリア州玄関口のパース、そして更に南に200km下った風光明媚な港町バンバリー。果てしなく広がる牧場と牛の群れ、野生のカンガルー、地平線に沈む壮大な夕陽、高台にあるホテルを吹き抜ける爽やかな風、眼下に広がる雄大なインド洋、真っ青な空とまぶしい日差し、ふかふかの芝生、平屋建ての豪邸等、日本では味わえないけた違いの大自然。そしてバンバリーのゆったりとした時の流れとホスピタリティ。ここで過ごした9日間の体験、学び、出会いは子供たちにとって一生忘れられない宝の思い出になると共に、将来につながるかけがえのない財産となったことは間違いありません。私自身もたくさんの発見、学び、感動がありました。一部ですが2点か紹介させて頂きます。



○コミュニケーションは「頭ではなく心」次第

「言葉は現地に行くのが一番早い」とよく言われますがその意味が分かりました。ホームステイ、買い物、食事、現地の小学校訪問等を通してメキメキと会話力を付けていく姿に驚きました。気が付けば現地の小学生と普通に遊んでいたりと、初めて会ったお年寄りの方々に折り紙を教えていたりしました。小学生の吸収力、適応力は想像以上でした。私も実感しましたが、やはり耳が慣れてくると、実際に使われている言葉、イントネーション、速さに慣れてきます。あとはこちらに「理解しよう、伝えようという気持ち」があれば会話力がアップすることを改めて分かりました。

○感動をもらったコミュニティーセンターでの交流

ホームステイを終えた後半は、様々な交流の場がありました。市長表敬セレモニー、小学校訪問、お年寄りの方が集まるコミュニティーセンター、ライフセービングクラブでのBBQ等。訪問の先方で、子どもたちは感謝の気持ちを込めて出し物をしました。英語の挨拶、日本の伝統民舞（エイサー、ソーラン節、東京音頭）、合唱（オーストラリアの国民的愛唱歌「ウォルシングマチルダ」）をやり遂げました。中でもコミュニティーセンターでの交流は会場が感動に包まれる一場面でした。参加していたお年寄りの皆さんが、涙を流しながら一緒に歌ってくださり、最後に盛大な拍手を頂きました。時代を超え、海を越えても変わらないもの、繋がれるものがあることを実感しました。この時の映像はどこかで共有されることを願います。

今回の派遣に際し、ご協力を頂いたバンバリー市のミゲル市長はじめ市議会、職員の皆様、ホストファミリーの皆様、現地ガイドのイップさん、ドライバーのテリーさんをはじめ道中支えて頂いた全てのスタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

4

蒔かれた種を大切に

オーストリア派遣団 団長 世田谷区教育委員会学校教育部 副参事 赤司 祐介

出発前の学習会での活動の一つに、現地の学校や区長に披露する出し物の検討がありました。ただ、現地との調整を担っている通訳士の方から「不自然な流れになるのであまり準備しない方がよい」という話を聞いていたため、簡単な練習にとどめ、「失敗してもいいから、しっかりと気持ちを伝えて来よう」ということだけ子どもたちと確認していました。

私は長年、教師として子どもたちと過ごしてきましたが、このような一大イベントで発表するとなれば、「失敗は許されない」「完璧なものを披露したい」という思いから、

待っているときの並び順や出場の仕方、立ち位置、挨拶のタイミング、退場の仕方等をしっかり決め、時には厳しい言葉をかけながら、何度も練習を重ねるものだと思ってきましたし、実際にそのようにしてきましたので、少し不安な気持ちを抱えながら出発しました。

聞いていた通り、実際に現地では、いつ、どの場面で発表するのも明確には決まっていなかった状況でしたが、私の心配をよそに、子どもたちはその都度とても素晴らしい挨拶や歌声を響かせてくれました。そのうち、行程の中で予定されていた場面だけではなく、隙があれば披露し、その場の雰囲気や聴衆の反応を楽しむようになりました。学校や区長表敬のほか、音楽家の墓地見学では「ベートーベンに捧げよう」とベートーベンのお墓に向かって「歓びの歌」をドイツ語で厳粛に歌い、セタガヤパーク（世田谷公園）では紅葉する樹木に囲まれる中で「もみじ」をしっかりと歌いました。また、ドゥブリング区長表敬では、区長が姉妹都市提携と同じく40歳の誕生日を迎えたことが分かり、急遽ハッピーバースデーを歌って盛り上がりました。

現地では、他にも様々なことが明確に決められていないことを実感する体験が多くありました。電車が予定通りに来ないという話はよく聞いていましたが、それだけでなく停車位置もその時によって大きく異なるため、長いホームを走って電車に乗り込んだり、学校訪問では体育の授業で使用する「かもしれない」ということで運動着を持って行ったものの、体育の授業が行われなかったり、レストランの料理の量が皿ごとに全く異なっていたり・・・。

日本では、高度経済成長の歴史の流れもあり、決められたことをいかに正確にできるか、みんなと同じようにできるかということが大切にされてきました。そうした教育の積み重ねが、日本人の生真面目さや勤勉さ、正確さを育ててきたのだと思いますし、外国人から称賛されるように、それは素晴らしいことだと思います。しかし、オーストリアでの生活を経験し、短い期間ではありましたが、その場の雰囲気に応じて柔軟に考え行動することの大切さを改めて実感しました。

これからの時代を生きていくためには、明確な答えがない中で最適な考えを自ら見付け出し、臨機応変に実践していく力が求められます。今回の海外派遣だけで簡単に身に付くものではありませんが、違う学校の友達や先生と未知の土地で生活を共にし、初対面の外国人とコミュニケーションを重ねた経験は、今後の人生に大きな影響を与えるものとなったことは間違いなく、これからの社会を創っていく上で大切な種が子どもたちの中に蒔かれたものと思っています。今後、成長と共にその種を育てていき、将来、素敵な花を咲かせてくれることを期待しています。



5 小学生海外派遣団



6 学習会等日程表

回数	日 時	会 場	実施内容
1	令和6年6月15日（土） 午前10時30分～午後0時30分	桜丘区民センター	派遣決定通知書 交付式 教育長あいさつ 第1回 学習会 （派遣団別オリエンテーション） 第1回 保護者説明会
2	7月21日（日） 午前9時30分～午後0時30分	教育総合センター	第2回 学習会 国際理解のためのワークショップ 第2回 保護者説明会
3	8月25日（日） 午前9時30分～午後0時30分	区立若林小学校	第3回 学習会 挨拶・アトラクション練習 学習テーマ確認
4	9月22日（日） 午前9時30分～午後0時30分	区立若林小学校	第4回学習会 挨拶・アトラクション練習 学習テーマ確認 第3回 保護者説明会
5	10月13日（日） 午前9時30分～午後0時30分	代田区民センター	第5回学習会 挨拶・アトラクション・決意表明準備 第4回 保護者説明会 出発式
6	11月17日（日） 午前9時30分～午後0時30分	教育総合センター	第1回 帰国後学習会 派遣振り返り 報告書、発表資料 確認
7	令和7年1月19日（日） 午前9時30分～午後0時30分	教育総合センター	第2回 帰国後学習会 発表資料 確認 報告会 練習
8	3月2日（日） 午前10時～午後3時30分（予定）	世田谷区民会館	報告会

7 オーストラリア団 派遣報告



(1) オーストラリア バンバリー市について

バンバリー市は、西オーストラリア州の州都であるパースから約180キロ南にある港町です。広大なインド洋に面し、19世紀後半のゴールドラッシュ時代の様子を今に伝える建物が残る、美しい街並みが続いています。町のすぐ近くに白い砂浜が広がり、クーンバナビーチでは、近辺までやってくる野生のイルカに出会うことができます。郊外へ行くと、ユーカリの森の中で、野生のカンガルーやユニークな形のワイルド・フラワーを見ることができます。



■バンバリー市の概要■

面積：約65 km²

人口：約3万2千人

東京からの所要時間：約13時間（マレーシアおよびパース経由）

東京との時差：-1時間

世田谷区の小学生がバンバリー市を訪問したことがきっかけで、1992年11月に両都市は姉妹都市の提携を行いました。それ以来、両都市における小学生派遣が毎年※行われています。そのほかにも、スポーツ分野や芸術分野における交流も行われています。

※…世田谷区からの派遣は令和2年～令和4年度、バンバリー市からの派遣は令和2～5年度は行っておりません。



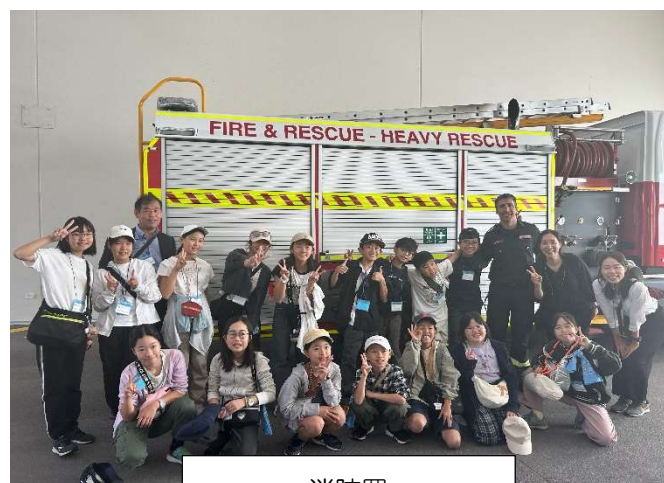
(2) オーストラリア団 日程表

	月 日 (曜)	発着地/ 滞在地	現地時間	交通機関	内 容
1	10月31日 (木)	区 役 所 発 成 田 空 港 発 マレーシア着 マレーシア発 パース着	05:00 05:15 10:05 17:00 19:50 01:25	専用バス 航空機 専用バス	区役所集合 成田空港へ マレーシアへ パースへ 到着後、専用バスにてホテルへ パース ホテル泊
2	11月1日 (金)	パース 発 バンバリー 着	11:00 14:00 16:00 17:00	専用バス	ホテル発 バンバリー市へ移動 昼食 ビーチ散策 ホームステイ家族との対面 ～ ホームステイ ～
3	11月2日 (土)	バンバリー滞 在	終 日		ホストファミリーとの終日フリータイム ～ ホームステイ ～
4	11月3日 (日)	バンバリー滞 在	終 日		ホストファミリーとの終日フリータイム ～ ホームステイ ～
5	11月4日 (月)	バンバリー滞 在	08:00 08:45 09:00 11:15 14:00 16:00 17:00 18:15	専用バス 徒歩	ホストファミリーとのお別れ 世田谷のミーティングタイム バンバリー市消防署・山火事ワークショップ 学校訪問①(昼食) バンバリーシニア&コミュニティセンターで交流 市長表敬 地域住民とディナー ホテル着 バンバリー ホテル泊
6	11月5日 (火)	バンバリー滞 在	08:45 09:00 11:00 12:00 13:10 15:00 16:30	専用バス 徒歩	ホテル発 コミュニティガーデンボランティア ドルフィンディスカバリーセンター 昼食(市内レストラン) ワイルドライフパーク ホテル着(休憩) ライフセービングクラブ訪問 オージービーチゲーム オージーBBQ バンバリー ホテル泊
7	11月6日 (水)	バンバリー発 パース滞在	09:45 10:00 11:15 14:20 15:30 16:30 18:30	専用バス	ホテル発 バンバリー図書館 学校訪問②(昼食) バンバリーミュージアム 9月に世田谷を訪れた小学生団との交流 バンバリー出発 ホテル着 夕食(市内レストラン) パース ホテル泊
8	11月7日 (木)	パース滞在	09:30 10:30 12:30 14:40 16:15 16:45 18:00 19:00 21:00	専用バス	ホテル発 コフヌコアラパーク フリーマントル散策と昼食 水族館(AQWA) モンガー湖散策 キングスパーク 夕食 お土産購入(パース市内) パース夜景見学後、空港へ
9	11月8日 (金)	パース 発 マレーシア着 マレーシア発 成 田 空 港 着 成 田 空 港 発 区 役 所 着	02:25 07:55 09:40 17:30 19:30 21:00	航空機 専用バス	マレーシアへ 機中泊 成田空港へ 到着、入国審査、通関手続 世田谷区役所へ 帰国式後、解散

(3) オーストラリア団 写真



成田空港



消防署



Djidi Djidi Aboriginal Primary School



シニアコミュニティセンター



市長表敬



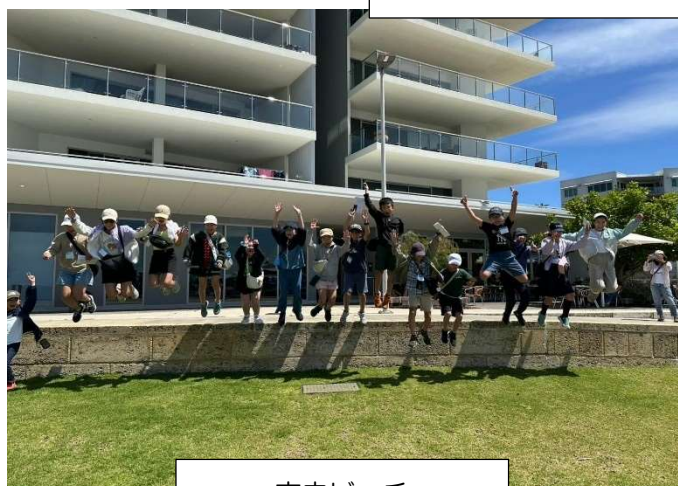
コミュニティガーデン



ドルフィンディスカバリーセンター



Leschenault Catholic Primary School



市内ビーチ



ライフセービングクラブ



バンバリー小学生団と交流



コフヌコアラパーク



キングスパーク



パース市内

(4) オーストラリア団 児童・引率報告書

○児童報告書（五十音順）

- I.F. 「『Kaya!』文化との出会いに感謝」
- E.N. 「ホストファミリーとの三日間」
- O.H. 「言語の壁を超えて」
- K.S. 「オーストラリアバンバリー市に出会って」
- K.S. 「オーストラリアでの生き物体験と食」
- S.S. 「心に残ったオーストラリア」
- S.W. 「人の優しさに触れたオーストラリア」
- S.S. 「驚き！感動！Australia！！」
- T.S. 「たくさんの実感であられた9日間」
- T.Y. 「最高だったオーストラリア」
- C.M. 「心をひとつに学んだこと」
- T.H. 「オーストラリアでの学びと思い出」

- T.K. 「心で通じる」
- M.A. 「楽しかった9日間」
- M.Y. 「最高の THE 9DAYS」
- M.K. 「オーストラリアで学んだこと」

○引率報告書

- 引率 千歳台小学校主幹教諭 浅田 典子 「Let's try を合言葉に」
- 引率 城山小学校主任教諭 山口 実夏子 「『挑戦』を応援したオーストラリア」
- 引率 教育指導課指導管理係 細川 亜里紗 「充実した9日間を振り返って」

「Kaya！」文化との出会いに感謝

I.F.

「カヤ！」これを聞いたとき、私は what?と思いました。聞いたことのない言葉だったからです。これはアボリジニの言葉で「こんにちは」、「ようこそ」という意味だと教えてもらいました。このことから、私が9日間のオーストラリアの派遣で一番心に残ったのはアボリジニ文化です。

アボリジニとは、オーストラリアに昔から住んでいる先住民のことです。バンバリー市のホームページで調べたところ、この地域には4万5000年以上前からアボリジニの先住民が住んでおり、ヨーロッパから来た人たちと衝突した歴史もあることを知りました。



私たちはアボリジニの生徒が在籍し、アボリジニ文化を大切にしている学校を訪問しました。そこでは生徒たちがアボリジニ語と英語を混ぜて使っていたことにとっても驚きました。アボリジニ語と英語という、ふたつの言葉が全く違って、ごっちゃにならないのかなと、とても不思議になりました。

バンバリーの街の中やキリスト教の学校でも、あちらこちらにアボリジニの絵が描かれていました。黄色に緑に赤に青一。私はひと目見て、カラフルでお洒落でかわいいなと思いました。アボリジニの絵は特徴的で、ドットをいっぱい書いて絵が完成します。理由は昔のアボリジニの人たちは、文字を書く習慣がなかったため、地面にドットを描き、地図にしており、それが現代の人に伝わった結果、ドットで絵を描くようになったそうです。

このようなことを知り、この地域の人たちはきっとアボリジニの文化を大事にしているのだろうなと思いました。

もうひとつ印象に残ったのは、ジェスチャーの大切さです。

私はホームステイをしていた時に、ホストファミリーにビーチや川に何回もつれて行ってもらいました。バンバリーの人にとって、ビーチは生活の一部になっていると感じるとともに、泳ぐ知識がないとビーチなどでは遊べないのだろうと思いました。今回の派遣中にはライフセービングクラブに訪問しましたが、サメに襲われてしまったり、助けて欲しくても遠くて声が伝えられない場合に使えるジェスチャーがたくさんあり、命を守ることができると知りました。例えば、手をグーにして上げれば『助けて』というポーズなどがあります。ホームステイの時も、ホストファミリーにうまく言葉がわからなくても、『ジャスチャー』というものがあれば、大丈夫だと思った経験をなん度もしました。

オーストラリアに行く前は、みんなとの仲が深まっていなくて「大丈夫かな」と心配していました。しかし、たくさんのアトラクションを、いろんな場所で披露したり、みんなのことを知ったり、理解したりするにつれてどんどん一体感が高まっていきました。この16人での交流を続け、この経験のことを語り合い、楽しみたいです。

最後にこの海外派遣に関わってくださったすべての方々に感謝します。ありがとうございました。

ホストファミリーとの三日間

E.N.

まず3日間のホームステイをして、1日目はオーストラリアの有名なベジマイトというしょっぱいジャムのようなものに挑戦しました。ベジマイト、納豆に醤油を沢山かけたようなにおいて、味はしょっぱくてパンにバターと一緒に少し付ける位なら美味しかったです。

2日目はミートパイを食べてました。オーストラリアでは、ケチャップをかけて食べると知って驚きました。そして、農場の横を通った時に日本ではみたことがない足だけがとても大きい馬がいて驚いていると、ホストファミリーがその馬は、昔馬車を引いていた馬だと教えてくれて、さらに驚きました。その後、海に行って足だけ



海に入ったら日本よりもとても気持ちよくて、遊んでいたら大きな波が来てめくっていたズボンが濡れました。オーストラリアの海では、3方向から波が来ているので、3回に一回位大きな波が岸まで届くと教えてもらいました。オーストラリアの海は貝殻の柄が鮮やかでとても綺麗でした。

3日目はスーパーマーケットに行ったのですが、日本と違いカゴにキャスターが付いていて、キャリーケースのように引くことができ運びやすくなっていました。そして日本よりシリアルの種類が多くて、その中でもカラフルなシリアルがあって驚きました。バンバリーでは特別な日には親族で集まってご飯を食べると言う習慣があるそうで、私たちのホームステイ最終日には、親族で集まってくれました。その後キャンプファイヤーをしてマシュマロを焼いて食べました。この三日間はオーストラリアの生活や英語でのコミュニケーションなどを学んだ最高のホームステイでした。

次の日、消防署に行ってみ学をさせて貰いました。そして私はボランティアに選ばれて、実際に消火活動に使っている服を着させてもらいました。着てみて、とても重く走れない程でした。そんな重い服を着て消火活動している消防士さんはすごいなと思いました。アボリジニの学校では、アボリジニアートやアボリジニの食べ物「ダンパー」などを作ったりして、アボリジニの人たちの文化が少しわかりました。

そしてコミュニティーガーデンに行きました。コミュニティーガーデンとはボランティアの人たちなどで協力して、野菜や花などを育てて貧しい人たちなどに収穫した野菜などをシェアするところです。ボランティアの人たちだけで全て自給自足しているなんてすごいなと感じました。日本よりボランティアをやっている人が多いことなどを学びました。そしてボランティア活動に興味を持ったので日本でできるボランティア活動をしていきたいです。

最後にキングスパークでみんなで遊んだカンガルー鬼ごっこは一生忘れられない思い出になりました。このオーストラリアの海外派遣でオーストラリアと日本の食文化の違いやいオーストラリアの生活に触れることができました。

言語の壁を超えて

O.H.

「交流するって楽しい!」私がシニアコミュニティセンターや、小学校への訪問をした時そう感じました。シニアコミュニティセンターや、小学校の人は私たちのことを歓迎してくれ、積極的に交流してくれました。

今回の海外派遣で私が一番印象に残った事は、シニアコミュニティセンターと小学校への訪問です。この二か所では言語の壁や文化の壁、



年齢の壁などオーストラリアの人と私たちの間にある小さく見えて大きな壁の全てを超えて交流して「let's try!心を一つに学び合おう」のスローガンにもあるような挑戦的な学び合いができたと思いました。最初は、距離があったけど、パフォーマンスをする前、紹介をするという役割があったためみんなよりも前に立った時、周りにしんとした空気が広がりました。前を見るとみんなこっちを見てくれていました。そのおかげで自信を持って最後まで全力のパフォーマンスをすることができました。また、パフォーマンスが終わった頃には、もっとやりたいという気持ちでいっぱいになっていました。シニアコミュニティセンターでは、心を一つにしてみんなでダンスをしたり、言語の壁や年代の壁を超えて折り紙をしたりしました。小学校の子たちとは、楽しみ合いながらクリケットや、フットボールなどのオーストラリアで遊ばれているスポーツを教えてもらったり、小学校の子も習っている日本語を使って「私は〇〇」の〇〇の部分にものの名前を入れて笑い合ったりして日本語でコミュニケーションをとっている感覚で話したり、自己紹介などの簡単な会話を通してお互いのことを共有しあったりしながらご飯を食べたりしました。

私は、この二か所で感じたことや、分かったことがあります。一つ目は、オーストラリアの人の性格です。オーストラリアの人は、知らないことに興味を持ってくれ、受け入れてくれる優しい性格だということ。また、積極的に話しかけてくれたり、遊びに誘ったりしてくれる明るい性格だということが分かりました。二つ目は、オーストラリアの人たちがどのように他文化を受け入れてきたのかということです。知らないことや新しいことに興味を持ってくれる人たちだからこそ、アボリジニ文化以外の新しい文化たちを受け入れることができたのだと思いました。また、交流しようという優しい心があるから私も気持ちよくパフォーマンスをできたのだと思います。

今回、自分の気持ちを態度や行動で示したり、言葉にしてみたりすることは自分たちが思っている以上にとても大きな価値があるということ、また、過去の文化を尊重しながら、新しい文化を取り入れ、現在ある問題を発見し改善していくことで未来につながるということが分かりました。これからは、自分の意見も大切にしつつ、他の人の意見も取り入れていくことで視野を広げたり、自分の意思を態度や言動などではっきりと示したりして将来に生かしていきたいです。

オーストラリアバンバリー市に出会って

K.S.

今回の海外派遣は、私にとって初めての海外経験、さらに飛行機に乗るのも初めてでした。出発前はバンバリーの人とコミュニケーションをとれるのか、また、無事日本に帰って来れるのか不安な気持ちでいっぱいでした。そのような中で、現地の人々の温かさに出会いました。言語が違ってもかかわらず、すれ違う人たちが私たちに「こんにちは、どこから来たの？」と話しかけてくれてとても嬉しかったです。このように知らない人にも心を開いてくれる温かい気持ちを私を含め日本人も見習いたいと思いました。それだけでなく、バンバリーは空気が美味しいと思えるほど素敵なところで、私はいつの間にか不安な気持ちを忘れていました。



この海外派遣では私の選んだテーマである SDGs についてたくさん学びました。特に注目していた項目は「ジェンダー平等を実現させよう」と「つくる責任・つかう責任」でした。

市長表敬ではバンバリー市の市議会議員の半分が女性であることを知ったり、市のボランティア消防団員の半数近くが女性であったり、小学校訪問では生徒たちが男女一緒に遊んでいる姿を見て、ジェンダー平等が進んでいると思いました。水族館では海のプラスチックゴミをキーホルダーにしてお土産として売っていたり、路上にはゴミ箱やリサイクルボックスがたくさん置かれていました。調べると日本ではゴミ箱が爆発する事件などがあるためゴミ箱を無くしたそうです。バンバリーではつくる責任・つかう責任の工夫や取り組みをたくさんしているのだと思いました。

今回の派遣で一番思い出に残っているホームステイでも発見がありました。夕食はお父さんがメインディッシュを作っている時にお母さんがサラダを作って短時間で準備をし、後片付けはお父さん、その時お母さんは洗濯をしたりと常に分担して家事を行っていました。これはジェンダー平等に関係していると思いました。

このバンバリー派遣では多くの人と出会い、多くの成果を得ました。今まであまり英語はできませんでしたが、市長表敬の挨拶のために英語で練習した結果、本番では市長さんなどが微笑んでうなずいてくれていました。この思い出は今後英語を勉強するときの大きな自信になりました。また、訪問するごとに発表したアトラクションをはじめ、みんなと協力する大切さと集団の力というものを学びました。そして何よりホームステイや現地の人との交流を通し、言語が違っていても心を開き、心を込めて人と接することで相手と分かり合えるということ、そして自分から積極的に英語でコミュニケーションをとることが重要であることを実感しました。

最後にこの海外派遣でお世話になった引率の先生方、区職員の方々、現地で付き添ってくれた方々、ホストファミリー、そして助け合いながら楽しい時間を共に過ごした派遣団の仲間全員に深く感謝します。今後は、ここでは書ききれないほどのバンバリーの経験を家族や学校の先生、友人などに伝え、SDGs の取り組みが広がっていくよう貢献したいと思います。

オーストラリアでの生き物体験と食

K.S.

僕は、世田谷区の小学生海外派遣の代表として、オーストラリアのパースとバンバリーに9日間行ってきました。

普段から、生き物が大好きな僕は、オーストラリアに行くことをとても楽しみにしていました。その中でも楽しみにしていたことは、たくさんの生き物に触れ合うことと、オーストラリアの魚料理を食べる事です。ホームステイ先のホストファミリーは優しく、親切で、生き物がいる色々な場所へ連れて行ってくれました。印象に残っている触れ合いは3つあります。

まず、サンフラワーアニマルファームという触れ合い型農場へ行きました。そこで、カンガルーの赤ちゃんを抱っこさせてもらいました。大人のカンガルーと比べると、とても小さくて、柔らかくて、日本ではできない体験だと思いました。その他にも、子ヤギを見たり、豚やエミューなどに餌をあげました。日本では餌を生き物にあげる時、紙コップや小さな入れ物で、餌も少しですが、オーストラリアでは、とても大きいバケツで餌の量も多く、驚きました。日本の動物園では、動物に触れることが難しく、触れる種類も限られますが、オーストラリアでは、自然が身近にあるからなのか、簡単にいろいろな生き物に触れ合えます。鳥の種類が多かった事も印象的でした。

次に、西オーストラリア州南西部の有名かつ最長の栈橋である、バッセルトン栈橋に行き、水中散策と海洋博物館のガイド付きツアーに参加しました。海洋博物館では、建物の中から、海中の様子を観察出来ます。海の中に水族館が出来たのか？と思うくらい、小魚がたくさん集まっていて、見たことのない魚もありました。海の中が透明でとても綺麗でした。海洋博物館には、人間が捨てたゴミなどの漂流物がたくさん展示してありました。ビンや、ペットボトル、ランプや、とう器でできたポットなどもあり、こんなものが海に浮かんでいたら、そこに住む生き物たちは怪我をしてしまうのではないかな？と思いました。生き物が暮らす自然を守るために、僕たち人間は絶対に海にモノを捨ててはいけません。オーストラリアの綺麗な海を守ってほしいなと思いました。

最後に、帰国する日にコアラパークでコアラの子どもにユーカリをあげながら抱っこできたことは、日本では絶対出来ない経験だったので、とても嬉しかったです。

オーストラリアの食について、僕はオーストラリアではどんな魚料理が食べられているのかを知りたかったので、ホストファミリーに魚料理を食べたいです、とお願いしたところ、スズメダイの仲間の唐揚げを食べました。魚の唐揚げは、同じ魚で作れないかもしれませんが日本の魚でも代用できそうなので、自分で作り家族や友達に食べてもらい、オーストラリアの食文化を伝えたいと思います。

最高に楽しかった9日間でした。またいつかバンバリーに絶対行きたいです！オーストラリア最高！！



心に残ったオーストラリア

S.S.

僕のオーストラリアでの探求テーマは、オーストラリアと日本のバリアフリーの比較でした。

なぜかという、学校の「福祉の授業」やボランティアビューローでの体験を通して興味を持つようになり、「オーストラリアはバリアフリーが進んでいる」と本でも読んだことがあったからです。実際にオーストラリアに行ってどんな違いに気づいたかという、土地が日本の20倍もある広大なオーストラリアは、大都会のペースでも建物自体が低く



て階段を作る必要がなく、住んでいる人にとって「段差」が驚くほど少ないということでした。

また、街のいたるところに「みんなで譲り合って歩道は使いましょう」と看板が立っていて、どんな身体的な特徴を持つ人でも、気持ちよく過ごせるよう心くばりがされていると感じました。

実は、建物のバリアフリーよりも僕が強く感じたのは、「心のバリアフリー」でした。オーストラリアで出会った人との交流を通して感じたのですが、他民族国家であるオーストラリアでは、様々な文化を受け入れる大らかな文化が根付いているということです。例えば、訪問したアボリジニの学校でも、アボリジニ以外の生徒も受け入れて、アボリジニの文化を広く理解し合おうとしていました。また、訪れた砂浜では犬や馬のためのビーチがある事を教えてもらい、動物への思いやりも深いことが印象的でした。その一方で、日本に帰って改めて日本のバリアフリーに目をこらすと、日本にも特徴がありました。それはバリアフリーの種類の多さです。音声案内、点字ブロック、優先レーンなど様々な種類のバリアフリーが整えられています。

これは、僕が考えるに、日本は狭い土地の中でより近い距離でみんなが生活するので、よりたくさん工夫が必要だったからだろうと思います。結果的に、今回の参加を通して、それぞれの良し悪しを比較するのではなく、それぞれいいところがあり、お互いのよいところをわかり合うことが大切だと学びました。

こんな形で、色々な体験をしましたが、一番印象的だったのはホストファミリーのやさしさです。例えば、ニルギ洞窟やビーチなど色々なアクティビティを提案してくれましたし、僕たちがリクエストしたプールやキャンプファイヤーも楽しむことができました。また、獣医をしているホストファミリーのお父さんは、野生のカンガルーを見に連れて行ってくれ、オーストラリアの動物について色々な話を教えてくれました。僕はこれから英語の勉強を頑張って、いつかホストファミリーをもう一度訪ねたいなと思っています。

最後に、今回の海外派遣に協力してくれた世田谷区の方、派遣団の引率の先生、オーストラリアでお会いした皆さん、そして今回の参加を応援してくれた学校の先生や友達、一緒に助け合った派遣団の仲間たち、出発の日までフォローしてくれた家族に、心から感謝します。

人の優しさに触れたオーストラリア

S.W.

僕のオーストラリアに行った目的は、自然や動物の保護の違いを知り、レッツトライの精神を持ち、お互いの文化を知り合う事でした。

オーストラリアに行ってみると、広大な土地と乾燥した空気、綺麗な海にとっても感動しました。自然に関わる施設に行った時に、日本より環境を守りたいという意識が強く、ボランティアの人がとても多いことに興味を持ちました。ボランティアの方々がいることでオーストラリア独自の自然が保たれていることが分かりました。オーストラリアには様々な固有種がい



ます。例えばカンガルーやコアラ、クオッカなどです。僕が初めて野生のカンガルーを見た時には動物園とは違い、何十頭の群れを作り、広大な土地で自由に動き回る姿がとても迫力があり、感動しました。喧嘩しているカンガルーを発見し、ホストファミリーのアリくんと盛り上がりました。また、西オーストラリアにはコアラが好むユーカリが生えていないのですが、コフヌコアラパークではコアラを抱っこすることができました。抱っこした時はユーカリを求めてよじ登って来ました。小さい子なのに力強く、たくさんのユーカリを食べてくれて嬉しかったです。

オーストラリアは固有種を守る取り組みをしていますが、固有種は今、減少しています。その原因の一つが外来種が増えたことです。その外来種はなんとウサギやキツネで驚きました。ウサギが増えることで、カンガルーなどの食べる草の取り合いになったり、キツネはクオッカを捕食してしまいます。これらの外来種が増えることを防ぐためにカンガルーやクオッカが判断できる毒薬を撒いて外来種を少なくすると、メリットもありますが、毒薬を摂取して死んだ外来種をワシが食べてしまうことでワシなどの猛禽類が少なくなってしまうデメリットもあります。日本の自然界と同じように外来種を減らすには様々な工夫をしないといけないことが分かりました。

もう一つの目的であるレッツトライの精神を持ち、文化を知り合う事は僕がこれまで経験してきたことの中でもとても刺激的でした。人の仲の深め方が日本とは違い、いつも褒めてくれたり、リアクションが大きかったりするので、すぐに友達になれました。オーストラリアの人は自分に自信があり、前向きでいつも笑顔でした。ホームステイでも「疲れているか、お腹空いているか、何がしたいか」を優しく聞いてくれたので緊張も和らぎました。ホストファミリーも日本に来たことがあり、お互いの国の文化を知り合うことができました。行く前は英語をうまく話せるか心配なところもありました。でも英語をうまく話すよりも自分の思いを伝えたいということが大切だと気づきました。

最後にオーストラリアで仲間と共に学んできたことは一生の経験になると思うのでそれを忘れずに今後の人生にも生かしていきたいです。ありがとうございました。

驚き！感動！Australia！！

S.S.

「こんな世界があるんだ」私は世界の広さに感動しました。日本との生活や文化の違いをたくさん見つけ体感し、また色々な生き物や大らかでフレンドリーなオーストラリアの人々と触れ合い、最高の時間を過ごすことができました。

特に印象に残っていることは、ホストファミリーとの生活です。はじめはドキドキしていましたが、会ったら優しい表情で「スーツケース持とうか」など声をかけてくれて、とてもホッとしました。美しいダムや海など色んな場所に連れていってくれて、想像を超えた大自然に感動しました。コアラやカンガルーの赤ちゃんを抱っこしたり、羊にミルクをあげたりと様々な動物と触れ合いました。ホームステイ先にも犬や猫が5匹いて、外には柵のない場所にも動物がいて、動物は身近で生活の一部であることを実感しました。

生活の違いも数多く発見し、まず家に靴を脱ぐ玄関がなくて驚きました。靴裏の汚れを落とす道具があり、家の中でも靴を履くスタイルで、生活するうちに私もすぐに慣れました。ホストファミリーのいところや友達などたくさんの方が集まってくれて一緒に食事をし、主食はパンやポテトで、ミートパイやフィッシュ&チップス、ベジマイトを塗ったパンなど、日本では味わえない料理を食べさせてくれました。『いただきます』といった声かけはなく、バラバラに食べる感じでしたので、感謝の気持ちを言葉にする日本の文化は、ずっと大切にしたいと思いました。そして、日本の遊びである折り紙やあやとり、ダンスなども披露し、喜んでもらえました。家族のように接してくれたホストファミリーは、私の宝物のような大事な存在です。

現地の学校訪問では、アボリジニのアートやオーストラリアンフットボールなどを一緒にしました。学校はとても広く、教科書がなく、また給食がなくお弁当を持ってきました。日差しが強い国なため、校庭では帽子がないと遊べない決まりがあり驚きました。

街並みや建物にも驚きと発見がありました。車用の信号機が縦にあったり、青から赤信号に変わる間にカウントダウンが始まるものもありました。道は広く、緑がいっぱいでゴミがなく、カンガルーの飛び出し注意の看板があることにもびっくりしました。昔は刑務所だった場所は、まるでお城のようで怖いイメージがなく、街並みと上手に調和していました。家は一軒家の平家が多く、屋根にソーラーパネルが付いていたり、スーパーマーケットでは野菜や果物など量り売りが多く、フードロスを減らす取り組みが盛んで、SDGsが進んでいることをこの目で見る事ができました。

この9日間、自ら考えて行動し、積極的にコミュニケーションをとることがとても大事だと学びました。完璧に英語が喋れなくても、単語を並べたり、身振り手振りで伝える努力をすることで、友達の輪を日本だけではなく、世界に広げて、自信をつけることができました。何事も諦めずに挑戦することの大切さを今後も忘れず、将来に生かしていきたいです。



たくさんの実感であふれた 9 日間

T.S.

私は 10 月 31 日から 9 日間、世田谷区代表の海外派遣団としてオーストラリアに行ってきました。たくさん学んできたことがある中、私が実感したことは主に二つあります。

一つ目はうまく言語を話すことはできなくても、単語や体を使って表現することで相手に伝えることができることです。国境の壁を越えて積極的に話しかけるという私の目標やオーストラリア団のスローガンに入っている「Let's try」を意識して、ホームステイ中ホストファミリーに単語や簡単な文章でたくさん話しかけました。すると、「英語が上手だね」と褒めてくれて自信につながりました。伝わらなかったこともあったけれど、ペアの子と一生懸命に身振り手振りで伝えようとしていると、ホストファミリーも一生懸命に聞き取ろうとしてくれて嬉しかったです。また、伝わることができたときは達成感でいっぱいになりました。ホームステイでは、うまく言語を話すことはできなくても、単語や体を使って表現することで相手に伝えることができることを実感しました。



二つ目はオーストラリアと日本の自然への接し方の違いです。バンバリーの街にあるインド洋は青が澄んでいてとてもきれいでした。浜辺にゴミが一つも落ちていなく、自然を大切にしていることが分かり、日本との違いを感じました。また、ドルフィンディスカバリーセンターでは傷がついてしまっていた子ガメを保護している水槽があり、足や手を失っているカメもありました。日本ではそのような生き物に対して義足を使うことがあるけれど、オーストラリアではあえてそのようなことはせずにカメ自身で対応できるようにしているそうです。自分で対応できるようにさせるような取り組みはこれからの日本の動物にも必要だと感じました。ドルフィンディスカバリーセンターで日本との違いを一番感じたのは、イルカを水槽に入れていないところです。日本の水族館などでは水槽に入れて飼育しているけれど、バンバリーでは飼育をしているのではなく、野生のイルカを見えるように工夫をしているだけで、強制的にイルカを連れてきたりショーをしたりしていないことにとても感心しました。自然界のそのままの状態を観察することができれば、イルカにとってストレスになりづらいと思いました。オーストラリアの自然との触れ合いではオーストラリアと日本の自然への接し方の違いを実感することができました。

オーストラリアで学んだこと、実感できたことをもとにこれからの学習、社交活動に活かしていきたいと思います。また、たくさんの人たちにバンバリーの話をして、バンバリーに興味を持ってもらいたいと思います。

最後に今回の海外派遣に協力してくれた世田谷区、派遣団の引率の先生方、陰でサポートしてくれた家族、そしてオーストラリア派遣団のみんな、今までありがとうございました。思い出が詰まった 9 日間は一生忘れません。

最高だったオーストラリア

T.Y.

僕は、オーストラリアでの9日間の生活で思い出を作ったり、日本では学べないような四つのことを学んだりしました。それは日本との文化の違い、オーストラリアの動物のこと、海外派遣で気づいた普段の生活に生かせること、オーストラリアの人の優しさの4つです。

1つ目は、日本との文化の違いや気持ちの表現の仕方について学びました。一番文化の違いについて学べたのは現地の小学校への訪問です。僕たちが行った学校では、日本とは違い英語だけではなく、アボリジニ語を学んでいたり、アボリジニ文化のアボリジニアートを学んだりしていました。また、休み時間には、クリケットという野球のようなスポーツを一緒にして、とても楽しかったです。楽しいときや嬉しいときは日本とはあまり変わらず一緒に気持ちを共有できて、僕はとても嬉しかったです。また、日本人よりもオーストラリア人の気持ちの表現の仕方が大きいことにも気づきました。



2つ目は、自然や動物について学びました。オーストラリアは日本とはちがいで、自然が色々なところにたくさんあり、目を疑うような色彩豊かな動物がたくさんいます。また、ホームステイでは羊に触ったり、馬に触ったりして動物とたくさん触れ合いました。また、ドルフィンディカバリーセンターやパース市内の水族館で西オーストラリアにいる魚や動物について学ぶことや西オーストラリアが行っている保護活動などの活動についても学びました。

3つ目は、海外に行くことによって、普段の生活にも生かすことのできる良い習慣を学びました。僕は、空港で一度パスポートを落としました。だから僕は、自分の荷物をどこに入れたかを自分で管理することがとても大切だと思いました。また、5分前行動が大事だということも感じました。僕は、この9日間5分前行動をすることで焦らずスムーズに行動することができたからです。他にも、どこでも相手のことを考えて行動することや誰にでも挨拶をすることが大切だと思いました。

4つ目は、オーストラリアの人の優しさを知りました。僕は最初ホームステイでオーストラリアの人の家で3日間過ごすことがとても心配に思っていたけれど、オーストラリアの人はみんなとても優しく、言葉が通じなくても「何がしたい」や「何が食べたい」などと聞いてくれてとても優しいなと思いました。また、ホストファミリー以外の人も僕たちのことをとても考えてくれて嬉しかったです。

このように、僕は日本では学べないような4つのことをこの9日間で学ぶことができました。他にも様々な人との交流や動物との触れ合いをすることができました。とても楽しい思い出がたくさん作れました。次もまたこのようなことができるといいなと思っています。

心をひとつに学んだこと

C.M.

私は世田谷区の海外派遣団員としてバンバリー市に行きました。両親と離れるという寂しさや不安がありましたが、仲間といふことでとても楽しい9日間を過ごすことができました。私たち16人の目標は「Let's try! 心をひとつに学び合おう」でした。

私がオーストラリアで学んだことは三つあります。

一つ目は自分の課題「オーストラリアの自然を守る活動」について、オーストラリアの方は自然との距離が近いからこそ、固有種を守り続けられているということを知りました。コアラを抱っこできたり、カンガルーにえさをあげたり、エミューを近くで見えたり、カンガルーポーという珍しい植物を学校で見ることができたりしました。家の近くには、きれいな川や海があり、夜には満天の星空を見て自然が近いことを実感しました。そのうえで、ドルフィンディスカバリーセンターで怪我をしたカメを救出し保護している事、山火事ワークショップでは、山火事を少なくするためにボランティアが中心になり発火の原因となる小枝や落ち葉を拾っている事を聞きました。日本でも自然との距離を縮めたら、日本の自然を守ることができると思いました。

二つ目は、慣れない場所や言葉で生活し困っても、オーストラリアの方はたくさん助けてくれることを実感しました。一番大切な思い出になったホームステイでは、最初は緊張してあまり英語で話すことができませんでした。しかし、ホストマザーは私たちの体調や食に気をつけてくれました。またロックルン君とアメリアちゃんとは川や家のプールで笑いながら遊ぶうちに緊張はほぐれていき、親しみをいただきました。ホームステイをしたことで、オーストラリアの人々は優しくおおらかな人柄だと気づき、素敵だと感じました。ホストファミリーと今度会った時にたくさん会話がはずむように、もっと英語を勉強したいと思いました。また、学校訪問ではどこでランチを食べようかと迷っている時に、現地の子が笑顔でさそってくれ、面白い話をしてくれて心がほぐれオーストラリアの学校に友達ができ、うれしく思いました。私も日本に外国の方がいた時に優しく接したいです。

三つ目は、オーストラリアの方が日本文化に興味をもってっていると知りました。学校訪問では、日本語で現地の学校の友達が積極的に話しかけてくれてびっくりしました。そして日本の歌やダンスを披露した時に、歓声が大きく日本文化が好きだということがわかりました。シニアの方との交流の時では、私が折り紙でハートを作ったらとても喜んでくれたり、あやとりが自然にできる方がいてとても驚きました。このことから、オーストラリア以外の方にも日本文化を伝えたいと思いました。

このような貴重な学びができたのは先生方や私たちを支えてくださった世田谷区やバンバリー市の皆さんのおかげです。そして、一緒にLet's tryをした16人の仲間にも、お互いが協力したからこそ楽しめたので心から感謝したいです。



オーストラリアでの学びと思い出

T.H.

僕が、今回の派遣で学んだことは、3 つあります。僕の探究テーマは、「オーストラリアの歴史と自然」でしたが、一つ目は、オーストラリアの人々は優しいということです。僕は、ホストファミリーとの対面で緊張していましたが、そんな僕を温かく迎えてくれて、とても優しいと感じました。二つ目はオーストラリアの人々が自然に寄り添っているということです。オーストラリアは広く、たくさんの固有種もいますが、オーストラリアの先住民、アボリジニは自然に寄り添いながら自然と共存していました。例えば「コアラ」という名前はアボリジナルから来ていて、「水を飲まない」という意味だそうです。生き物たちをよく観察し、それぞれの個性を見つめているオーストラリアの人々はすごいと感じました。



そして、3 つ目は歴史です。歴史は、バンバリーミュージアムで学ぶことができました。そこで知ったのは、イギリスよりフランスが先にオーストラリアに来ていたということです。オーストラリアはイギリスの植民地として利用されていたので最初にオーストラリアに上陸したのはイギリスだと思っていたので、驚きました。さらに、法律上は今でもイギリスの国だということを知ってもっと驚きました。

次に、オーストラリアでの思い出です。まず、僕は海釣りをしたことがなかったので、釣りをしたいと言うと、その翌朝、釣りに連れて行ってくれました。魚は釣れませんでした、とても楽しかったです。次に、トランポリンの施設に行ったことです。ホストファミリーの家には直径2.5m ぐらいの大きなトランポリンがありましたが、近くにある巨大なトランポリンの施設に連れて行ってくれました。色々な種類のトランポリンなどで遊べて、とても楽しかったです。また、ホストファミリーに「ブッシュ」というオーストラリアの特別な森林地帯に連れて行ってもらいました。そこには、先住民が食べていたという実や、オーストラリアの動物が食べる植物など、元々のオーストラリア自然がそのまま残されていました。そして、その山頂から見た景色はとても綺麗でした。180 度の海と、180 度のバンバリーの街並み、その奥にはダーリン山脈も見えて、とても綺麗でした。ブッシュを下山している時には、50 万年前の石灰岩からアンモナイトの化石を見つけることができました。学校訪問では、クリケットやOG フットボールというオーストラリアのスポーツを楽しんだり、アボリジナルアートを体験したり、現地の小学生と大好きなテニスで勝負をしたりしました。

僕は、この経験を今後に関し、世界の人たちと積極的にコミュニケーションをとりながら、広い世界のことについてもっと知りたいです。

心で通じる

T.K.

私がオーストラリア派遣で一番感じたことは「心で通じる」ということです。特にそれを感じたのは、ホームステイの時とシニアコミュニティセンターを訪問した時です。

まずホームステイについてです。オーストラリアに行く前は、家族と離れて一人で行くことが少し不安でしたが、出発前にホストファミリーがメールをくれて、何をしたいかや何を食いたいかなど色々聞いてくれて安心しました。何度かやり取りをして、会うのが楽しみになりました。到着後、私が日本で作って持って行った名前のイニシャルのキーホルダーをホストファミリーのオリビアにあげたら、飛びはねるように喜んでくれて、すぐに学校のリュックに付けてくれました。とても嬉しかったです。

オリビアは私の妹と同じ年齢で、性格も似ていました。そのため、言葉がわからなかったけれど、考えていることが大体わかる気がしました。例えば、私が折り紙で作ってあげた手裏剣を持って一緒に裏庭に出た時、オリビアが手裏剣を投げる真似をしながら何かを話しました。その中に「tag」という単語があって、その単語は鬼ごっこという意味だと知っていたので、手裏剣に当たったら鬼になってしまう鬼ごっこかなと思いました。鬼ごっこをしている途中、オリビアが裏庭にある遊具を触りながら「バリア」と言っていたので、そこはバリアゾーンなのかなと思いました。オリビアも嬉しそうにしていたのでとても嬉しかったです。

日曜日には、おじいちゃんやおばあちゃん、いとこなど親戚が集まって、オーストラリアの伝統的なローストディナーを食べました。みんな優しくしてくれて、本当の家族のように感じました。

ホストファミリーとお別れした数日後、ライフセービングクラブで、みんなで一緒にディナーを食べた時、オリビアが「かなこ〜」と呼んで来てくれたので、とても嬉しかったです。ホストファミリーとお別れするのがとても悲しかったので、またすぐにオーストラリアに会いに行きたいと思いました。また、日本にも来てほしいと思いました。

次はシニアコミュニティセンターについてです。センターの人たちと折り紙を一緒に折った時、折り方を英語で説明できなくても、「triangle」など知っている単語やジェスチャーを使って教えてあげると折ることができて、喜んでくれたので、よかったなあと思い、これが「通じる」ということなんだなと実感しました。また、みんなで歌ったり踊ったりしたのが、良かったです。100歳のおじいちゃんも踊っていたので驚きました。

この海外派遣を通して、言葉がわからなくても、身ぶり手ぶりで伝えようとする気持ちが大切だと思いました。また、国や文化が違って、相手の気持ちを考えて接すれば分かり合えることを学びました。日本でも外国でも今回の経験を生かしていきたいです。

最後に、支えてくれた引率の先生、仲良くなった友達に感謝したいと思います。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。



右が私です。

楽しかった9日間

M.A.

私は9日間オーストラリアに行ってきました。私のめあてであった交流することと自然と触れ合うこと、私たちの合言葉であった「let's try! 心を一つに学び合おう」をいつでも忘れずに、楽しんでできました。印象に残っていることは三つあります。

一つ目は楽しみにしていた学校訪問です。現地の子とアクティビティを通して分かり合えることができたと思います。全員が日本語の勉強を取り入れていて、色々な教科の名前を日本語で教えてあげたら喜



左が私です。

んでくれました。外国語を勉強しあい、お互いが母語じゃなくても、いざ話すとなったときに分かり合えるようになるというのは、いいと思ったし嬉しかったです。パフォーマンス披露では、頑張っ

て覚えた日本の踊りや、オーストラリアの愛国歌で拍手をもらえて嬉しかったです。二つ目は色々な生き物や自然と触れ合えたことです。水族館では水槽の中に手を入れてヒトデを触ることができました。コフヌコアラパークで初めて見たエミューの目力、表情、餌の食べ方、動きが怖かったです。コアラは思っていたより臭く、抱っこした時はコアラの爪が肩に刺さって痛かったです。でも、ユーカリを食べている様子がとてもかわいかったです。ワイルドライフパークでは、カンガルーが私に懐いてくれたので感動しました。そのカンガルーは、餌を乗せている私の手の上に手を乗せて食べてくれたり、帰るときゲートのところまで見送ってくれたりした所がとても可愛かったです。

今回の旅では何回か海に行きました。インド洋はどこも波が荒く、海水が日本と比べてとてもしょっぱかったです。また、砂浜に打ち上げられるゴミや海藻がなかったことに驚きました。オーストラリアではビニールシートなどを張ってゴミなどを減らす活動を行なっているそうです。

三つ目はホームステイです。食文化と家の造りに驚きました。朝食で出たパンケーキを見て私はとても驚きました。日本のふわっとしているパンケーキとは違い、とても薄い生地で塊のバターを何度も入れながら焼きその上にハチミツやチョコをぬり、折って食べていました。私の想像以上に甘いものを、美味しそうに食べていて驚きました。洗面台とシャワーとトイレが一つの部屋にあり、シャワーとトイレの間に何も仕切りがなかったことに驚きました。庭はとても広く日本の公園のような遊具がたくさんありました。

この旅は私にとって人生の中で1番楽しかったし忘れられない思い出となりました。今後はこれからの生活や、ウインドサーフィンに活かしていきたいです。引率の先生方、保護者の方々、学校の友達、16人の仲間たちがいたからこそ楽しかった9日間でした。本当にありがとうございました！

最高の THE 9DAYS

M.Y.

僕はこの9日間、コフヌ・コアラパーク、キングスパークのような美しい自然、Dijidi Dijidi Aboriginal Primary School で学んだようなオーストラリアの守り伝えられてきた文化、バンバリー博物館やフリーマントルで知ったオーストラリアのさまざまな人が紡いできた歴史を、身近に肌で体験することができました。

そして、僕はこの9日間の派遣団の中で、とても心に残ったことが三つありました。



1. シニアコミュニケーションセンター

年が離れていて、あまりコミュニケーションが取れないかと思っていました。しかし、僕たちが『心』で一緒に繋がりたいと思っていた気持ちが伝わりました。そして、一緒に日本の文化やオーストラリアのことなどを共有しあいコミュニケーションが取れたと感じました。

2. アボリジナルに対する respect

～カトリック、アボリジナル系の学校への訪問、オーストラリアの街中～

学校訪問では、カトリック、アボリジナルというそれぞれ文化、歴史、宗教などが全く異なっているにもかかわらず、オーストラリアを守り続けてきたということに対する敬意やアボリジナルの歴史や、文化に対する尊敬の念がとても表れているなと感じました。また、これまでの出来事を水に流すのではなく、それをきちんと今に活かしている姿勢がとても素敵で見習いたいと思いました。それ以外にも、街中では、至るところにアボリジナルの旗があり、そのことからアボリジナルに対する尊敬の念や、敬意が払われていると感じました。

3. ホームステイ

ホームステイで、どのような家族なのかは事前に教えてもらっていても、仲良く一緒に楽しんでいけるかが、不安でした。しかし、空き時間ができると一緒に鬼ごっこをしたり、おにぎりを一緒に作ったり、好きなことを共有しあい、様々なことを伝え合えました。英語があまり喋れなくても、自分の英語力、Google 翻訳、身振り手振り、ジェスチャーなど様々な形で沢山コミュニケーションを取り、最高に楽しみあえたホームステイでした。

これらの僕の心に残ったことから自分から、目標、考え、やってみたいこと、好奇心を持って積極的に行動すれば、『血』や、『性別』、『生まれた場所』、『年』、『思想』がちがっていても双方の『心』と『心』で繋がってコミュニケーションを取り合い、考えを交流し合えることを学びました。そして、この学んだこと、感じたこと、不思議だったことや、嬉しかったこと、うれしかったことなどのオーストラリアでもった様々な気持ちと、引率者の先生や、ホストファミリーをはじめ、ガイドさんや、バスの運転手さんなど、僕らを色々な場面で支えてくれたおかげで素晴らしい経験をすることができたということに対する感謝をずっとずっと忘れずにこれからの生活に活かしていきたいです。

オーストラリアで学んだこと

M.K.

私はこの海外派遣を通してさまざまなことを学びました。その中でも大きく2つに分けて伝えたいと思います。1つ目は自然の広大さです。ホストファミリーに海に連れて行ってもらったのですが、オーストラリアの海はとても広くそしてとても綺麗でゴミひとつ落ちていません。オーストラリアの海の広大さは想像通りでしたが、まるで写真のようなゴミのない海に驚きました。また、コミュニティーガーデンボランティアでもオーストラリアの自然を実感することができました。そこでは水や電気は全て自然からもらっています。これがまさに自足自給の生活なんだと思いました。しかしよく考えると私のホストファミリーの家の庭にもトマトやレモンが植えてあったり、太陽光パネルが他の家の屋根についていたり、オーストラリアは自然との距離が近く自然を大切にしている国で、それも1人ではなく個人個人がそれぞれ意識してこの国を守っていると思いました。また、オーストラリアではサーフィンなど自然を思いっきり使ったレジャーが多く自然との付き合い方が上手だなとも感じました。



2つ目はコミュニケーションについてです。まずオーストラリアに来てから1番最初に話したり、交流した機会があったのはホストファミリーとの出会いです。私は最初ファミリーもこっちと同じように日本語の単語を使ってくれると思うから大丈夫だと思っていましたが、実際は挨拶や会話など全て英語だったので焦ってしまい初日はとても疲れました。そこから頑張って積極的に喋れるようになっていこうと思い、話題を頑張って作りました。オーストラリアの街並みや日本と違うことなど気づいたこと、疑問に思ったことはとにかく喋ろうとしました。話題が膨らんで会話ができたり、新しいことを知るのとはとても楽しく他の国と交流することって難しいけど、その分チャレンジをすること楽しむこと、コミュニケーションをとることは楽しいんだなと感じました。初日に行ったフリーマーケットではたくさんの人に出会いました。そこでも発見はたくさんあったのですが私が1番驚いたのはどんな人も必ず「調子はどう？」と聞いてくれることです。日本は無言でも買い物ができるくらい会話が少ない国だったので、やっぱり海外ってフレンドリーな人が多いイメージがあったけど、そうなんだなと感じました。そのあとも「どこから来たの?」「日本はどう?」など色々質問していただき日本に興味を持ってもらえて嬉しかったです。

私は今回の派遣を通して、チャレンジすることの大切さについて気づきました。自分のことは自分です。自分からチャレンジをしないとせっかくの機会や学ぶチャンスを逃してしまいます。チャレンジすることは必ず自分の人生に影響を与えます。これからもチャレンジすることを怖がらず、どんどん学んでいきこれからの人生に生かしていきたいと思います。

Let's try を合言葉に

オーストラリア派遣団引率 千歳台小学校 主幹教諭 浅田 典子

オーストラリア派遣団は、「Let's try～心をひとつに学び合おう～」をスローガンに掲げました。オーストラリアに向けて個人の目標を達成するという気持ちと、派遣団の仲間と協力して活動したいという思いが込められていました。このスローガンは、私たちの心の支えとなる大切な言葉となりました。私自身も「Let's try」を意識して、現地で失敗を恐れず多くの人に話しかけました。世田谷区や日本のことなどを伝えたり、オーストラリアについて質問したりして会話を楽しむことができました。

オーストラリアに着くと、翌日からホームステイでした。ロイロ日記から、子供たちがホストファミリーに色々な所に連れて行ってもらい楽しく過ごしていることが伺えました。日本のことを紹介したり、一緒に遊んだりするなかで自然にコミュニケーションが取れているようでした。私もホーム



ステイを経験し、『世界一幸せな動物』と言われるクオッカを見るためにロットネスト島に連れて行ってもらいました。透き通るような珊瑚礁の海や目の前に広がるインド洋、そして野生のクオッカに出会うことができました。ホストファミリーの家では、ミートパイを焼く調理機器や大型の食洗機など日本ではあまり見られない電化製品がいくつかありました。日本と違い、料理や片付けにあまり手間をかけない印象でした。けれども、夫婦一緒に食事の準備を行い、子供たちは食器並べや片付けをするなど家族で協力して生活する様子が見られました。

忘れられない思い出の一つは、シニアコミュニティーセンターで歌った「ウォルシング マチルダ」です。オーストラリアの伝統的なこの歌をシニアの方々が一緒に歌ってくださり、会場が一つになった瞬間は感動で胸がいっぱいになりました。リクエストを受け「もみじ」も歌いました。私もピアノ伴奏で参加し、音楽を楽しむ気持ちは世界共通だと感じました。

最終日に、キングスパークという公園で少しだけ“カンガルーおにごっこ”をしました。自由時間を楽しみにしていた子供たちは、まるで学校の休み時間のように無邪気に遊んでいました。その姿を見て、外国で共に過ごし毎日多くのことにトライし、一つのチームになれたことに感慨深いものがありました。

学校訪問や市長表敬など、普通ならできない経験をさせていただき世田谷区とバンバリー市が長年に渡って友好的な関係を続けてきたことを肌で感じることができました。引率として安全管理に気を配りつつ、自分自身も子供たちと同じ目線でたくさんの感動を味わわせてもらいました。児童が派遣団に参加したことで、将来外国へ目を向けるきっかけになったり、外国語や外国の人と関わることに興味をもったりする機会になることを願っています。これからも、バンバリーとの絆、ホストファミリーとの絆、そして派遣団との絆を繋いでいきたいと思います。

「挑戦」を応援したオーストラリア

オーストラリア派遣団引率 城山小学校 主任教諭 山口 実夏子



この写真は、ホストファミリーであるお父さんが馬専門の獣医で、そのお父さんが定期的に診ている牧場の馬との写真です。私たちのホストファミリーは、家で飼っている羊に餌をあげさせてくれたり、馬に会わせてくれたりと、動物との触れ合いの機会を作ってくれました。また、家庭菜園で育てているもの一つ一つについて教えてくれたり、入り江でカヤックをさせてくれたりと、自然との関わりの機会も作ってくれました。ホストファミリーとの時間だけでなく、コミュニティーガーデンでのボランティアやドルフィンディスカバリーセンター、ワイルドライフパークなど、多くの場面でオーストラリアで暮らす人々がいかに動物や自然を大切にし、共生するための工夫に尽力しているかを知ることができました。

私がこの世田谷区小学生海外派遣事業の引率に応募した大きな理由は「子供たちの三つの『挑戦』を応援したい」でした。一つ目は、おうちの方から離れて、面識のなかった仲間と共に海外派遣を体験する挑戦、二つ目は現地の方と交流する挑戦、そして三つ目はホームステイをして現地の方と生活をする挑戦です。

オーストラリア・バンバリーでは、子供たちが毎日たくさんの挑戦を見せてくれました。その中でも私が一番心動かされたのは、ホームステイでの挑戦でした。引率者の中で唯一、子供たちと同じホストファミリーの元で2泊3日を過ごしました。日本にいる間は、自分はどのように振る舞えば良いのか不安に思っていたのですが、今は何にも代えがたい貴重な経験をさせてもらったと思っています。

緊張した面持ちでホストファミリーと出会った初日、それでも自分が準備してきた自己紹介を一生懸命に伝えていました。二日目、三日目は、ホストファミリーが鍾乳洞や栈橋などたくさんのところを案内してくれ、子供たちをたくさん遊ばせてくれました。大きく変わったと感じたのは、夕食後の時間です。初日は食事を済ませたら、すぐに部屋に入っていました。二日目、三日目は夕食後にダイニングテーブルにタブレットとお気に入りのジュースを持ってきて、毎日の宿題であった日記を書くようになりました。日記には英語での一文を入れるようにしていたので、自分の言いたいことを英語で書き、それをホストファミリーがチェックしてアドバイスしてくれるようになっていきました。お父さんお母さんの横に子供たちがそれぞれ座り、話している姿を微笑ましく感じました。

最初は単語レベルのコミュニケーションだったり、私に翻訳を頼っていたりしていたのが、最終日には自分だけの力でコミュニケーションをとるようになっていく姿に驚き、また、それを間近で見られたことに心から感謝をしています。一緒にホームステイをした2人、そして今回引率したオーストラリア団の子供たちの挑戦する姿を忘れることなく、今後の教員人生において、これからのグローバル人材を育てていきたいと思っています。

充実した9日間を振り返って

オーストラリア団引率 教育指導課指導管理係 細川 亜里紗

私は教育委員会事務局の引率として、今回のオーストラリア団の派遣に参加させていただきました。派遣児童の募集段階から携わり、およそ1年をとおして準備をしてきましたが、それでも正直、無事に行って帰って来られるのか不安もあり、行く前は緊張していました。しかし、派遣前は挨拶程度の関わりだった児童たちが、これから向かうオーストラリアでやりたいこと、知りたいことなど気さくに話しかけてくれ、ほっとしたと同時に、この派遣が子どもたちにとって有意義なものになるよう、日本に帰国するまで全力でサポートしようと改めて決意しました。

滞在中は、市長表敬や学校訪問、消防署や図書館等を訪れましたが、どの訪問先も我々を迎えるにあたり、事前にたくさんの準備をしてくださったことを感じることが



左から2番目が私です

ができました。また引率も含めて、週末はホームステイをしました。ホストファミリーであるバンバリー市職員のチンさんご夫婦に様々なところに連れて行っていただきましたが、中でも街灯が一切ない小高い丘からみたバンバリーの満点の星空は息を呑むほどの美しさで、とても感動しました。ホームステイ中、何組かのホストファミリーとお会いすることがありましたが、どのご家庭もとても温かく迎えくださっており、バンバリー市のみなさんのおもてなしの心を行く先々で感じました。これもバンバリー市と世田谷区の姉妹都市関係が30年以上続いてきた結果であり、この交流のバドンをぜひ今後も繋いでいければと思いました。

子どもたちは事前学習会で踊りや歌、英語でのスピーチをたくさん練習してきました。披露する回数を重ねるごとに自信がつき、シニアコミュニティセンターでは現地の年配の方々が自然と英語の歌と一緒に歌ってくださり、国や世代を超えて、会場が一つになったことをビデオカメラ越しに感じることができ、涙がこみ上げてくるほど、感動したのを覚えています。

また、バンバリー市についてすぐ各家庭に分かれてホームステイ先に行くこともあり、ホームステイ前、子どもたちは少し不安そうな表情をしていました。しかし、週明けに再会したときは、その時の表情が嘘かのように、ホストファミリーとすっかり仲良くなっており、子どもたちの適応能力に驚かされました。また学校訪問でもジェスチャーや単語を使いながら、自ら話しかけ、最終的には現地の子どもたちと笑顔で走り回っている姿を見て、まさにオーストラリア団のスローガンである「Let's try!」を実践しており、私自身も非常に刺激を受けました。

最後に今回の派遣にあたり、各方面で携わっていただいたすべての方々に感謝いたします。普段は机上で行う業務が多いですが、今回引率として現地に行かせていただき、普段自分が行っている業務が、子どもたちの人生の貴重な経験の一つになっていることを肌で感じることができました。ぜひ現地に行った児童のみなさんには今回の経験をこれからの生活に活かしてほしいと願うと同時に、この経験を周りの友達にもたくさん伝えていってほしいと思います。

8 オーストラリア団 派遣報告



(1) オーストリア ウィーン市 ドゥブリング区について

ウィーン市はオーストリアの首都です。東京と同じように23の区があります。ドゥブリング区は市の北西部に位置し、第19区と呼ばれています。豊かな森と美しいドナウ川に囲まれ、ぶどう畑の広がる閑静な住宅地です。音楽の都ウィーンにふさわしく、ベートーヴェンゆかりの地としても大変有名です。区内には、かつてベートーヴェンが住んでいた家や散歩した道が歴史のままだに残されています。また、交響曲第3番『英雄』や第6番『田園』はこの地で生まれたといわれています。



■ドゥブリング区の概要■

面積：約 25 km²

人口：約 6 万 6 千人

東京からの所要時間：約 13 時間

東京との時差：-8 時間（サマータイム期間中は-7 時間）

世田谷区とドゥブリング区はともに23区の1つであること、域内に雄大な川が流れていること、緑豊かな住宅都市であること。このような共通点から、両区は1985年5月姉妹都市提携を行いました。1992年から小学生交流が始まり、それ以来、世田谷区の小学生が毎年※ドゥブリング区を訪問しています。また、教育分野以外においても、両区内の合唱団の共演コンサートなども行われています。 ※・・・令和2年～令和4年度は行っておりません。



(2) オーストリア団 日程表

	月 日 (曜)	発着地／滞在地	現地時間	交通機関	内 容
1	10月19日 (土)	区 役 所 発 羽 田 空 港 発 ミ ュ ン ヘ ン 着	05:45 06:00 10:15 17:00 20:30	専用バス 航空機 専用バス	区役所集合 羽田空港へ ミュンヘンへ 到着後、専用バスにてザルツブルクへ移動 ホテル着 ザルツブルク 泊
2	10月20日 (日)	ザルツブルク滞在	9:00 17:00	専用バス	ザルツブルク市内見学 ミラベル公園・ペーター教会・モーツァルト生家・ レジデンツ広場・ホーエンザルツブルク城 等 ホテル着 夕食(ホテル) ザルツブルク 泊
3	10月21日 (月)	ホ テ ル 発 ザルツブルク発 ウ ィ ー ン 着	08:11 11:05 17:00	専用バス 列車 専用バス	駅へ 列車にてウィーンへ 到着後、ウィーン市内見学 昼食(市内レストラン) 世田谷公園・ウィーンの森・中央墓地 等 ホテル着 夕食(ホテル) ウィーン 泊
4	10月22日 (火)	ウ ィ ー ン 滞 在	09:00 14:30 17:00	専用バス	学校訪問①(昼食) 区長表敬訪問 ホテル着 夕食(ホテル) ウィーン 泊
5	10月23日 (水)	ウ ィ ー ン 滞 在	08:15 17:00	専用バス	ウィーン市内見学 ベートーヴェン博物館・ウィーン博物館・シェーン ブルン宮殿・自然史博物館 区長表敬訪問 ホテル着 夕食(ホテル) ウィーン 泊
6	10月24日 (木)	ウ ィ ー ン 滞 在	08:45 14:00 17:00	専用バス	学校訪問②(昼食) 昼食(市内レストラン) ウィーン市内見学 シュテンファン大聖堂・ケルントナー通り散策 ホテル着 夕食(ホテル) ウィーン 泊
7	10月25日 (金)	ホ テ ル 発 ウ ィ ー ン 発	10:00 13:30	専用バス 航空機	空港へ 成田空港へ 機中泊
8	10月26日 (土)	成 田 空 港 着 成 田 空 港 発 区 役 所 着	08:50 11:00 13:00	専用バス	到着、入国審査、通関手続 世田谷区役所へ 帰国式後、解散

(3) オーストリア団 写真



世田谷区役所出発



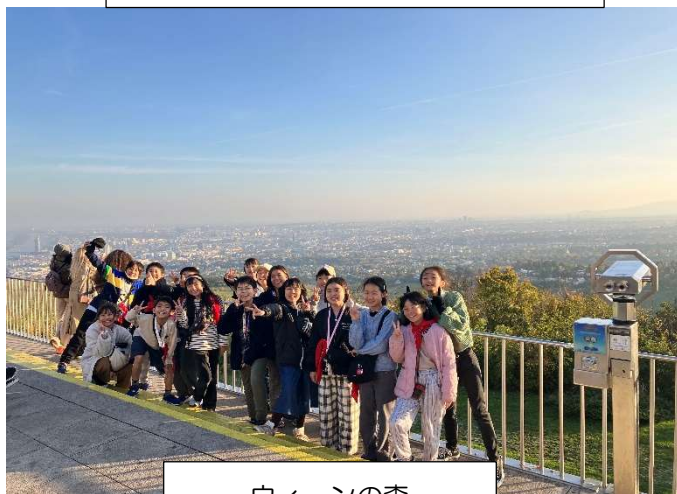
ザルツブルク市内



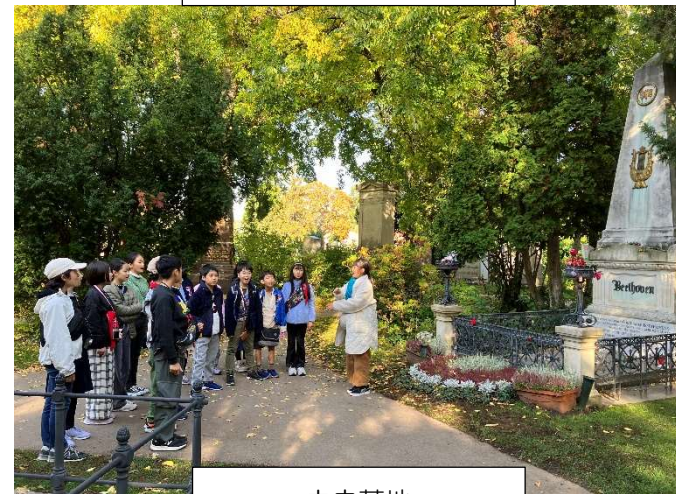
ヨーロッパ最古のレストランでランチ



ミラベル庭園



ウィーンの森



中央墓地



Maria Regina High School





区長表敬



世田谷公園



ベートーヴェン博物館



Musik Mittelschule Pyrkergrasse



ベートーヴェン像



現地ガイドのラートさんとお別れ

(4) オーストリア団 児童・引率報告書

○児童報告書（五十音順）

- I.T. 「オーストリアで感じたこと」
- O.R. 「みんな Danke schön！！」
- K.H. 「僕の海外派遣」
- K.M. 「オーストリアに学ぶ文化の継承」
- S.T. 「オーストリアでのかけがえのない経験」
- T.K. 「街並みとわかりやすい案内標識について」
- D.A. 「モーツァルトの国オーストリア！」
- H.Y. 「Fall in love with Vienna」
- H.Y. 「オーストリアが教えてくれたこと」
- H.S. 「素晴らしい出会いに Danke（感謝）！！」
- H.Y. 「音楽の都 平和とつながる道」
- P.E. 「オーストリアで感じたこと」

- M.R. 「まるで別世界、オーストリア」
- Y.A. 「オーストリアで感じたこと」
- Y.A. 「オーストリアの遊び・スポーツから感じたこと」
- Y.Y. 「海外派遣を経験して」

○引率報告書

- 引率 桜小学校主任教諭 堀江 温子 「『今しかない』をやらなくちゃ」
- 引率 上北沢小学校主任教諭 原口 美津紀 「『オーストリア』で一致団結！
楽しく学ぶ姿勢を大切にしよう！」
- 引率 教育指導課指導管理係 小池 直輝 「海外派遣事業の経験と学び」

オーストリアで感じたこと

I.T.

「あ、みてみて！飛行機からオーロラが見えるよ！」と行きの飛行機の中で友達の声が聞こえました。自分も見に行ったところ、本当に見えたのでびっくりしました。まさか飛行機の中からオーロラが見えるなんて思わなかったので、「すごい！日本から本当に離れたところに来たんだ。」と驚き、旅が始まったことを実感しました。

オーストリアで体験してきたことは沢山ありますが、行く前から頑張っようと思っていたことが二つあるので紹介します。



一つ目は、「向こうで折り紙を折ること」です。結団式の時から、自分の得意な折り紙を使ってなにかできたらいいなと思っていました。向こうの学校訪問の際に折り紙を折る時間がありました。一番最初に声をかけて来てくれた男の子とドラゴンや鶴を折ったのですが、その男の子は、やる気を持って折り紙を折ってくれたのと、実際に折り終わった時にとっても喜んでくれたので、僕も嬉しい気持ちになりました。言葉が通じなくてもお互いに、気持ちが通じればコミュニケーションを取れるということを学びました。

二つ目は、僕の学習テーマである少子高齢化について、区長表敬訪問のときに区長さんに質問することです。日本では少子高齢化が進んでいますが、ウィーンではどうなのか気になったからです。ウィーンでも同じく少子高齢化が進んでいるけれど日本ほど進んではないとのことでした。けれども、ウィーンが世界の住みやすさランキング第1位に輝いたこともあって、お年寄りが多くなったことから、街の中での高齢化が進んでいるとも教えてくれました。自分は、質問するときにもっと緊張するかと思ったけれど、区長さんが陽気で気取らない感じで対応してくれたので、思っていたほど緊張しませんでした。相手が緊張しないような雰囲気を作るのがとても上手だなと思いました。そのあと街歩きをしているときに気づいたのですが、バリアフリーとしてトラムの乗車する位置に段差があまり無く、お年寄りや車椅子の障害者などに優しい街だなと思いました。

感動したことも沢山ありました。例えば、向こうの街並みです。僕の今まで見てきた街並みの中で、一番綺麗だったと思います。一軒家が少なく、昔ながらの雰囲気のある集合住宅ばかりで、統一感がありとても古く、日本とはまた違う、西洋の歴史的な街並みで感動しました。また、ザルツブルグ城からの景色も凄かったです。街の全貌を見渡すことができました。街全体の建物の雰囲気に統一感があるから綺麗なんだと思いました。

僕はこれまでも、自分で体験することを大事にしてきました。今は、便利なインターネットが発達しているので、すぐになんでも調べられますが、インターネットだと正しい情報かどうか分からないし、自分で体験しなければ、絶対に心を動かされることはないと思うので、これからも自分で体験することを大事にしていきたいと思います。

みんな Danke Schön!!

O.R.

オーストリアのウィーンは音楽の都。音楽を習っている僕にとって憧れの場所です。出発前から楽しみでワクワクドキドキしていました。少し不安もありましたがオーストリアに降り立った瞬間に不安は全て吹き飛びました。「ああ、ここがオーストリア!!」とてもいい空気と人々の笑顔が僕を安心させてくれました。

僕が1番印象に残っていることは、モーツァルトとベートーヴェンについてです。僕は、演奏と作曲を学んでいますが、歴史についてはあまり知りませんでした。実際に訪れることができ貴重な体験ができました。

モーツァルトの生家では、今とはちがい、鍵盤の黒鍵と白鍵が逆になっていて折りたたみ式で持ち運びができるピアノがありました。見た目も黒ではなく木目調で、家具みたいでかわいらしかったです。僕は、あのピアノで演奏してみたいなとおもいました。

またモーツァルトはストープの近くで愛があふれる家庭に生まれたと知りました。宮廷音楽やオペラ、ピアノの曲など幅広いジャンルの曲を作っていました。

ベートーヴェンについて印象に残ったことは、鉛中毒や耳のことです。たくさんの病気になっていましたがそのような状態でも様々な曲を作っていて、人生を音楽にかけた情熱がすごいな、と思いました。

僕の研究テーマは、「オーストリアでストリートピアノを弾く」ことでした。なかなかピアノが見つからず、どうしよう、と思いましたが、ひとまず訪問した学校で弾くことができました。みんなが歓声をあげ、拍手をしてくれました。恥ずかしい気持ちもありましたが、とても気持ちの良い感覚でした。いつもの気持ちの良さとは違い、達成感がある気持ちよさでした。

学校訪問後、街中を歩いていると僕の耳にピアノの音が飛び込んできました。そしてストリートピアノの周りには人でいっぱいになり僕はピアノに引き寄せられるように心が動きました。僕はすぐに弾きたいと思いました。ただ、「今観光の途中だしなあ」と考えていたら、先生たちもピアノに気づいてくれてピアノを弾く時間を作ってくれました。そして僕は、鍵盤に指を置くと、学校の時より人がたくさんいたので緊張しましたが、弾き始めると指はスラスラと動き気持ちよく、演奏することができました。大勢の人から拍手と歓声をもらうことができ、オーストリアの人の温かい気持ちが伝わって最高の気分でした。今までピアノを弾いた中で1番気持ちが良かったです。

帰国して日本のストリートピアノを弾きに行きました。人が少ないのもありましたが、僕の演奏にあまり興味がないように見え、僕はもっと上手にならなくちゃいけないなと思いました。同時に、オーストリアのようにもっと音楽を身近に感じる環境を作りたいなと思いました。

今回の派遣は、貴重な体験で、とても楽しく自分に自信が持てました。この貴重なオーストリアでの経験を曲にしてみんなに届けたいです。みんな「Danke schön!!」



僕の海外派遣

K.H.

僕の 8 日間の大冒険が終わりました。僕達 16 人と先生方、中村さんとガイドのラートさんで僕が生きてきた中で 1 番の思い出を作って帰ってきました。

僕は夏休みの自由研究でウィーン図鑑を作りました。その過程で知った「塩の砦」を意味するホーエンザルツブルク城は絶対に見たかった場所です。お城から見た景色は絶景で僕が図鑑でのせた画像と同じ景色が目の前に広がっていて、思わず「ザルツブルグにきたぞー」と叫びたいくらいでした。現実とは思えないくらい感激しました。



もう 1 つの楽しみは電車に乗って移動することでした。改札がなかったり、電光掲示板があるのに時間通りに来ない電車があるのに驚きました。案内役のラートさんが電車に乗るために走っている人がいるから注意するようにと教えてくれました。日本は切符を買ってから電車に乗るまで安全で何かあったらすぐに知らせられる駅員さんもいて、すごく便利だなと思いました。

ウィーンでは音楽の都と実感できることがたくさんありました。道端や広場などあらゆるところで楽器を弾いている人がいて、街を歩いているだけでワクワクしました。広場ではグランドピアノがあって誰でもひけるようになっていました。先生と友達がそのグランドピアノを弾き本当に上手でその音をウィーンで聞いたことにとっても感激しました。

ウィーンの学校訪問では、みんな優しく、手厚く歓迎してくれました。僕は英語が喋れなかったけどジェスチャーや伝えたいという気持ちでコミュニケーションがとれたことも嬉しかったです。本当はもっともっと質問したいことがあったので英語の大切さも実感しました。生徒達はみんなとても歌が上手く、主に歌を基本とした授業があることが日本とは違って、常に歌と接しているなと思いました。

ウィーンやザルツブルクを歩いて行くと街中に歴史的な建造物があって、その迫力には圧倒されました。

公園や観光地などのトイレがすべて有料で綺麗に保たれていました。トイレの前にはおじさんがいて、親切にしてくれました。日本では見ることのできない馬車がすてきでした。

オーストリアでしか手に入れることができない飲み物のアルムドゥードラーをとにかく毎日飲みました。味はジンジャーエールに少しにている甘酸っぱく、ハーブの炭酸飲料だそうです。僕は土産に 1.5ℓ を 2 本買ってお母さんにびっくりされました。

日本との違いを空気からも全身で感じた 8 日間でした。まだまだ書ききれないことがあります。だから、僕は海外派遣で経験したことをみんなに伝えます。次に英語の勉強をします。将来は世界中を旅し、世界の大きさを知りつくしたいです。

オーストリアに学ぶ文化の継承

K.M.

あと少しでオーストリアに到着するという時、とてもわくわくし、「これから始まるんだ」という気持ちになりました。この一週間で数えきれないほどたくさんのことを学び、経験しました。特に、オーストリアの人々が自国の文化に誇りをもち、それを維持していくために日々努力していることに感銘を受けました。



一日目、ザルツブルグで朝を迎え、美しい街並みに心を打たれました。どれも古い建物に見えましたが、街全体に統一感があり、住んでいる人々が古いものを大切に生活していると肌で感じました。

ウィーンでは、シェーンブルン宮殿を訪れました。宮殿内部には、金をふんだんに使った部屋や、日本や他の国々から伝わってきた装飾品などがあり、オーストリアの繁栄の歴史に思いを巡らせました。調べたところ、宮殿が建てられた約300年前から宮殿の外観がほとんど変わることなく、その美しい姿が保存されていることが分かりました。宮殿の庭園も、当時の建築様式で主流だった線対称の造りでできており、手入れが隅々まで行き届いていました。宮殿とその庭園は世界遺産にも登録されており、国と国民が協力してそれを守っていることを知りました。

また、市内を散策している時、落ちていたペットボトルを拾って道のゴミ箱に捨てている人の姿を何度か見かけました。生活している人それぞれが意識して街の景観を美しく保とうとしていることが分かりました。ドゥブリング区の区長さんのところを訪問した際、街中にゴミ箱やリサイクルボックスを設置することで、街の景観を保つと共に、環境にも配慮していることを学びました。

ベートーベン博物館にも行き、ベートーベンが当時使っていたピアノが残されていましたが、このように昔の楽器が完全な形で見られることは非常に珍しいことだそうです。このことにも、オーストリアが文化を大切にしていることが表れていると感じました。街を歩いていても、モーツァルトやベートーベンなどの作曲家の存在が身近に感じられ、屋外にピアノが置いてあったり、街角で楽器を演奏している人たちも見かけました。

海外派遣で学んだことの一つは、「誰かが社会を動かそうと行動を起こさない限り、国の良い文化や風習が簡単になくなってしまうこと」です。次の世代に受け継がれていくように、明日からできる簡単なことでも少しずつ積み重ねていきたいと思います。

海外派遣プログラム自体も、互いに文化を伝え続けていくための大切な事業であり、多くの方々の力によってそれが実現されていることを、身をもって知りました。派遣団員の一人になることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

オーストリアでのかけがえのない経験

S.T.

僕は、この八日間で心に残る思い出がたくさんできました。

まず、日本の鉄道より短い間隔でホテルの真横を通っているトラムです。それは、どれも満員電車のように混んでいて、車よりもトラムを使う人の方が多いのではないかと思ったぐらいでした。街の至る所にトラムの駅があり、何本ものトラムとすれ違いました。そのため、それだけでオーストリアが、住みやすさランキング一位であることを実感させられました。今回は乗れませんでした。次にまた来る機会があったら乗りたいと思いました。

ホーエンザルツブルク城では、旧市街と川がうまく調和している景色が、とても綺麗でした。ガイド

さんによると昔、敵からの侵略にそなえて、高いところに建てたそうです。そのため大砲や、壁に穴を開けて銃を撃ち込むといった、日本の城にもあるような物もありました。

次の日は列車に乗り、ザルツブルクからウィーンに行きました。とても乗り心地がよかったです。そして日本とは違い、改札はなく、ほとんどの駅でホームと道路に段差がありませんでした。そのため車椅子に乗っている人でも乗りやすそうでした。他にも、駅の構内にはモニターで出発時刻と出発するホームがわかりやすくなっていました。

またウィーンの森では、大都会のウィーンの中に緑が広がっていて空気がおいしかったです。シェーンブルン宮殿には主に日本の佐賀県で作られている伊万里焼がありました。遠く離れた国の文化がありとてもおどろきました。日本と全く違う国だと感じていましたが、似ているところもあると分かって嬉しくなりました。

ウィーンの学校は、音楽に力を入れているところが多いそうです。学校訪問では、音楽と図工の授業をしました。音楽では「もみじ」とドイツ語で、「喜びの歌」を披露しました。図工の授業では、折り紙で遊び手裏剣とつるをみんなで作り、くす玉を全員にプレゼントしました。とてもよろこんでいるのがわかり、うれしかったです。言葉は通じなくても、英語やジェスチャーを使って、仲良くなることができました。そのため、別れることが悲しかったです。

午後は区長さんに会いました。今回は区長さんが40歳の誕生日の1週間後で、世田谷区とドゥブリング区の姉妹都市の交流も40周年でした。そのため、ハッピーバースデーの歌でお祝いしました。その後の質問タイムでは、環境を守るためにトラムをたくさん走らせていること、オーストリアの人は、景色を見るのが好きだから地下鉄ではなく、トラムをたくさん走らせる工夫をしていること、ザルツブルクからウィーンなどの人がたくさん乗るところは乗り心地を良くすることなど、知りたいことを詳しく教えてもらえました。

今回の旅では、仲間や先生の協力を得て、世界は広いと体感しました。この経験は、一生忘れることがないと思います。



前列の真ん中が私です。

街並みとわかりやすい案内標識について

T.K.

僕は、今回のオーストリア海外派遣に行って、特に「街並みとわかりやすい案内標識」というテーマを持って見してきました。僕は、豪徳寺というお寺の近くに住んでいます。最近、道に迷っている外国人観光客を多く見かけます。彼らを案内するときに、看板や標識がわかりにくいと言われたのでこのテーマにしました。世界でも有名なオーストリアの観光地には、どんなわかりやすくて便利な看板や標識があるのか、景観などに配慮しているのかを見てみたいと思いました。

主にザルツブルグとウィーンを訪問して気づいたところが三つありました。

まず一つ目は、街に公園や街路樹、ゴミ箱が多く、ペットを散歩できる公園もあったり、電柱が地下に埋まっていたり、ユニークなデザインのゴミ焼却場があったりすることで街の景観に配慮している所です。

特に世界遺産に登録されているザルツブルク旧市街のゲトライデガッセという通りでは、黒や金色などの鉄のフレームで作られた骨組みの看板が統一感がありました。統一感はありませんが一つ一つの店舗のデザインが鍵の形や、傘、草花などで芸術的に作られていました。建物の周りを見るだけでなく、上を見上げて楽しめるような感じがしました。看板も絵で表記されていて、昔からある靴屋は、靴の絵で表されていました。全体的に落ち着いた色の配色が多かったです。細かく分別もできるゴミ箱や、タバコの吸い殻入れもありました。

二つ目は、バリアフリーが充実していることです。電車では、ホームとの間にスロープが出てくることや車内にファミリールームという家族専用の座席がありました。標識に多くピクトグラムを使っていてこれは言葉がわからない人でも、理解することができます。

三つ目は、自転車専用道路があったことです。日本にもありますが、道幅が狭く車道に近くてあまり安全ではありません。オーストリアでは、ほとんどが道幅が広く白線や街路樹ではっきりと区別されているので安心して自転車に乗れます。

逆に日本のいいところは、二つあります。一つ目は、喫煙するところとしないところがきちんと分けられているところです。オーストリアは、街中で多くの人がいたところで喫煙をしていてポイ捨てがとても多かったです。

二つ目は、オーストリアには、落書きが多かったことです。ゴミ箱や柱、壁などにたくさん絵や文字の落書きがされていました。

今回の海外派遣では、2度学校訪問をして多くの子どもとたくさんコミュニケーションをとりました。僕らと同じくらいの年齢の子どもは、母国語がドイツ語にもかかわらず上手に英語や簡単な日本語で話してくれて、とても驚きました。

この海外派遣という経験を生かして、今後は英語や言語でのコミュニケーション能力をもっと高めたいと思いました。また日本の文化や景観を大切にしながらオーストリアの景観作りを参考に町作りの勉強をしていきたいと思います。



モーツァルトの国オーストリア！

D.A.

私は音楽が大好きです。その理由は、言葉が通じない外国でも、音楽と一緒に歌ったり、奏でたりするだけで、笑顔になったり、仲良くなったりするからです。

私のテーマは、「音楽家たちがどのように作曲をしてきたか」です。私が注目したところは2つあります。

1つ目は、「自然」です。例えば、モーツァルトはザルツブルグで生まれました。ザルツブルグは宮殿や修道院がたくさんあり、自然がたくさん残されていました。こんな環境で育ったから、モーツァルトは「神童」と呼ばれる大作曲家になったのだと思います。



2つ目は、「街並みや雰囲気」です。オーストリアは地震が少ないため、古い街並みがそのまま残っています。特に石造りの建物が多かったです。そのため、今でも300年前の歴史を感じることができます。

そして、街の雰囲気からも、「音楽の都」を感じることができました。モーツァルト像の前でギターを弾きながら歌っている人がいたり、リコーダーを吹いている人がいたりしました。このように、街に音楽という雰囲気が染み付いているから、いつも楽しい空気が流れているんだな、と思いました。

学校訪問では、合唱と折り紙をしました。合唱ではオーストリアの伝統的な歌を教えてくださいました。ザルツブルグの小学生は、合唱が上手な子が多かったので、みんな幼い頃から音楽を習っている子が多いのだと思いました。折り紙では、英語を話しながらみんなで楽しみました。会話で「セタガヤパークって知ってる？私は日本の世田谷というところに住んでいるんだ」と伝え、「そうなの。すごい」と反応してくれました。オーストリアの子どもたちは、歌がとても上手でした。ドゥブリング区の区長さんに質問してみると、「オーストリアの子どもたちはみんな音楽が大好きだよ」とおっしゃっていました。やはり「音楽の都」は音楽ファンが多いんだなと思いました。

私がオーストリアに行って心に残ったことは、食事についてです。なぜかという、インターネットで写真を見て日本人に合う食事を想像していたけれど、思ったより味が濃くてびっくりしたからです。日本は出汁で旨味を出しているけれど、オーストリアの食事は塩で旨味を出しているので、日本の食事よりも味が濃かったです。かぼちゃスープは日本と使っているかぼちゃの種類が違ったので、全然味が違いました。他にもサラダにイチゴやブルーベリーなどのフルーツが入っていて驚きました。ウィーンのチョコレートケーキ「ザッハトルテ」は濃厚で甘くて美味しかったです。

最後に、熱を出した時にもずっと一緒にいてくれた先生方、笑顔で接してくれた派遣団のみんな、準備に協力してくれた家族に感謝の気持ちを送ります。

Fall in love with Vienna

H.Y.

地上から1万m上空の夜空に、天の川のように煌めくオーロラが目飛び込んできた。みるみるうちに迫ってきては、飛行機の窓いっぱいに広がる。その幻想的な光と揺らめく姿を目の当たりにし、これから始まる冒険への不安と、高鳴る期待とが入り混じった自分の気持ちと相まって、オーロラが私の背中を後押ししてくれているかのようにさえ感じた。

数百年も昔、ベートーヴェンやモーツァルト、そして私の大好きなシュトラウスなど偉大な音楽家達が活躍したウィーンの街に降り立ち、私の胸は、期待で膨らんだ。小さい頃からヴァイオリンが好きで、習ってきた私にとって、ウィーンはまさに憧れの地だった。

この海外派遣に私は二つのテーマを持って臨みました。一つは、ウィーンがなぜ「音楽の都」と呼ばれるようになったのかを調べること。もう一つは、自分が外国人としての経験をするというものでした。

オーストリアには、古い石畳みと彫刻が施された石造りの建物が多く残っており、その美しい街並みに圧倒されました。また、モーツァルトの生家やベートーヴェン博物館、音楽家達が眠る中央墓地などの名所を実際に訪れ、また、街中で楽器を演奏している人々を見かけては、オーストリアの人々の音楽へのリスペクトを、肌で感じることができました。

ドゥプリング区の区長さんを表敬訪問した際、ウィーンが「音楽の都」と呼ばれる理由は、古くから音楽の中心であり、市民の生活に音楽が深く根付いていること、音楽の教育や環境が充実しており、音楽家達が世界中から集まってきているからだと教えて頂きました。そして、実際に訪れてみた「気づき」がありました。それは、ウィーンは音楽の歴史や伝統があるだけでなく、柔軟性と包容性に溢れた街だということです。

例えば、訪問先の学校では、とてもフレンドリーな雰囲気では私達を歓迎してくれました。日本の文化を伝えようと、一緒に折り紙をする機会がありましたが、逆に、折り紙でバラの花を作って私にプレゼントしてくれる生徒がいて、私は驚きと嬉しさで、緊張していた心が次第にほぐれていったのを覚えています。相手の国の文化を理解し、言葉に出さなくても行動で示してくれる、そんな彼らの姿から学ぶことが沢山ありました。

私は、この海外派遣を通して多くの気づきを得ました。柔軟性のある人は、自分らしさを持ちながらも、その考えにとらわれることなく、状況の変化に応じて臨機応変に対応できる強みを持っています。ウィーンが「音楽の都」として伝統を保ちながら発展してきたのも、時代の流れの変化に適応しながら、しなやかに、しっかりと根をはってきたからだと思います。そう遠くない未来に、私は、音楽を志す一人として、再びウィーンを訪れたいと思います。きっと、ウィーンの街は「おかえり！」と受け入れてくれることでしょう。

最後に、関係者の方々、引率の先生や仲間へ感謝を伝えたいと思います。



オーストリアが教えてくれたこと

H.Y.

私はN H K 東京児童合唱団に所属していて、ベートーヴェンの作曲した第九の『喜びの歌』を収録しテレビで放送される機会がありました。海外派遣に応募したのは『ベートーヴェンが見ていたであろう、晴れたる青空を見たい！』『音楽の都の人たちは音楽のことをどのように考えているのだろう』という気持ちを持ったからです。

実際に見たオーストリアの空は澄み渡っていてとても高く感じました。この空が普段見ている東京の空とも繋がっているの



だなのと思うと不思議な気持ちになりました。特にザルツブルグ城から見た青空は景色も美しく強く印象に残っています。そして、オーストリアで一番感じたことは音楽を大切にしている人の多さです。日本ではストリートピアノで足を止める人が少ないけれど、オーストリアでは誰かが弾くと足を止めて、最後まで聴き、心を込めて拍手をしている人が多いなと感じました。また、学校訪問の時に笑顔で楽しそうに歌っている生徒が多く、わたしと同じように歌を心から楽しんでいる人が言葉の通じないオーストリアにもいるのだと思うと嬉しくなりました。音楽を通してわたしたちは仲良くなれたような気がします。日本に戻ってからも、晴れた空を見るとオーストリアのことを思い出します。この空が繋がっている先に同じように音楽に励んでいる人がいるのだと思うと心が温かくなって、去年の合唱団の定期演奏会で歌った『地球をつつむ歌声』という合唱曲が頭の中で流れてきます。オーストリアではいつもそばに音楽がありました。音楽があることでやる気になったり楽しくなったり悲しい気持ちが癒やされたりします。音楽を楽しむ時間はオーストリアや日本だけでなく、世界共通で誰しものが必要としている時間なのではないかと思いました。

最後に、海外派遣ではたくさんの仲間ができました。最初は知らない子ばかりだったけど、みんなと仲良くなれて、いつの間にか不安はどこかにいなくなっていて、前日は『ついにオーストリアだ！』とワクワクしたのを覚えています。みんな優しく、助け合ったり支え合ったりして過ごしました。そんな仲間たちと一緒に、普段の学校生活では経験できないような貴重な体験をさせてもらいました。オーストリアの良いところ・日本の良いところ・仲間の良いところにたくさん気付けたと思います。この経験をこれからは人の心を動かせるような演奏をすること、お互いを認め合いながら周りの仲間と協力することに活かしたいです。そしてそのためにはわたし自身が心から楽しんで前向きに伝える気持ちが大切だなと思いました。教育委員会の方々、引率の先生、ガイドさん、そして一緒に過ごした仲間、関わってくれたみなさんに感謝します。ありがとうございました。

素晴らしい出会いに Danke(感謝) !!

H.S.

私は、10月19日から26日まで世田谷区の代表としてオーストリアに行きました。

初めての海外で、そして1週間以上も親と離れて過ごす事が今まで無かったので、少し不安もありましたが、研修期間を共に頑張ってきた仲間達16人と一緒だったので、その不安はいつしか楽しさへと変わっていました。

長時間乗っていた飛行機を降りて、到着してまず私の視界に飛び込んできたのは、ザルツブルクの美しい景色でした。

そこからホテルへと向かい、部屋に着いてもワクワクと興奮状態であまり眠れなかったのですが、次の日の朝目覚めた時に「あ！私は今、オーストリアにいるのだ」と、やっと実感がわきました。

私は小さい頃からダンスを習っていて音楽が大好きなので、オーストリアと日本の音楽にはどんな違いがあるのか、現地ではそれをテーマに学びたいと思っていました。

音楽の街ウィーンではストリートピアノがあり、音楽を通して街中で知らない人同士が繋がり、言葉が通じなくても“音楽”というルーツでこんなにも普通に人と人が繋がれる環境があるのだなあ、と感銘を受けました。

日本では見慣れない景色もオーストリアではこれが日常の風景で、音楽にも色々な形が沢山あり、オーストリアで見て素晴らしいと感じた事の形を、私なりの言葉や行動で日本でも発信していけたらと思います。

ウィーンでは、2校の学校訪問があり、まず1校目ではオーストリアの児童と一緒に喜びの歌をドイツ語で歌いました。今回のオーストリア派遣団が掲げていたスローガンは「一致団結、学ぶ気持ちを持とう！」だったのですが、みんなで歌っているその瞬間、団結力というもの強く感じたのを今でも鮮明に覚えています。

2校目では、運動を通してオーストリアの児童たちと交流がありました。一緒になったチームメンバーとは体を使ってコミュニケーションとったりしながら走り回り、汗を流しながら短い時間の中でも最高に楽しい時間を過ごせました。

言葉は交わせなくても、気持ちは届いているような気がして、そして何かが伝わってくる気もして、心が通じているように思いました。

この海外派遣事業を通して、私が一番伝えたいことは、人との出会いは無限で素晴らしいということです。こんなにも広い世界中で、様々な環境の中いろんな人と出会い、仲良くなるという巡り合わせには意味があるように感じます。

そして音楽には国境がない！あたたかい響き一つで伝わる・繋がるものがあるという新しい嬉しい発見ができて、この経験に感謝してこれからも日々学んでいきたいです。



音楽の都 平和へとつながる道

H.Y.

私の研究テーマは音楽文化についてです。小さい頃からピアノをやっていて、音楽が大好きでした。そこで音楽の都と呼ばれているウィーンに行けるとわかり、とても楽しみにしていました。

特に心に残ったことは、モーツァルトとベートーベンの生家に行き、実際に住んでいたところに入って見る事ができたことです。本当にここで生きて、作曲していたのかと思うと、実際に行くことができて信じられない気持ちになりました。家には当時のベートーベンの髪の毛、使ったことがない楽器や肖像画など、初めて見るものばかりでした。

憧れていた音楽家が住んでいた家・音楽が生まれた場所に直接訪れることができ、すごく嬉しかったです。

学校訪問ではドイツ語での「喜びの歌」や日本語での「もみじ」を歌いました。みんなが楽しく歌って心穏やかになってきて、音楽のちからを発揮できと思います。みんなと歌ったことで日本の子ども達とだけではなく、オーストリアの子どもたちとたくさん交流ができて、海外の子どもたちとの交流はこんなに楽しいのかと初めて知りました。世界に共通する「音楽」は、言葉がわからなくても楽しめるモノだと改めて感じました。また学校では、折り紙をオーストリアの友達に教えました。言葉が少ししかわからず、とても緊張しましたが、身振り手振りのジェスチャーで伝えたりして、気持ちを通じ合わせることができました。折り紙はオーストリアでは全く知られていないと思っていましたが、私たちに折り紙を教えてくれたオーストリアの友達がいて、とても嬉しかったです。

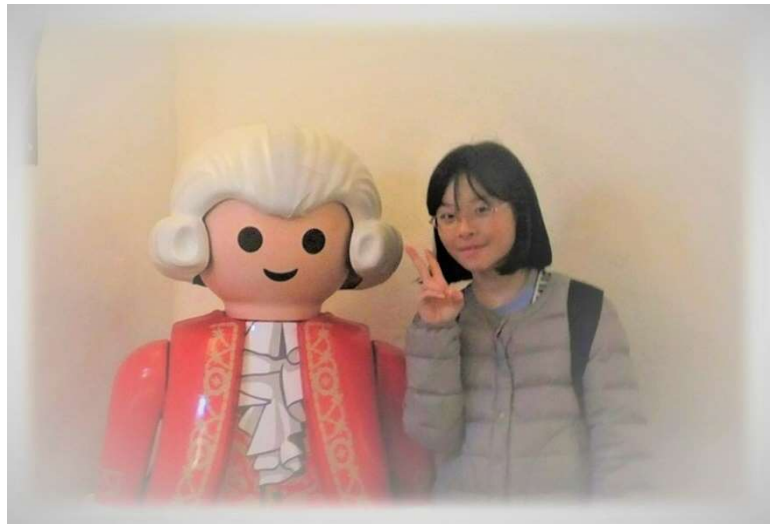
また、オーストリアの文化についても学びました。街中の建物は高く、教会、修道院、宮殿などの古い建物がたくさんあり、カラフルで目に止まる景色ばかりでした。オーストリアのザルツブルクにある街は、言葉がわからない人向けの看板がところどころにあって、とても工夫がされていました。昔の人々が繊細で素敵な建物を工夫して作り、現代まで残り続けていることに驚きました。

「温故知新」という言葉にもあるように、古くから作られたものから、新しいものが生み出されるのだとわかりました。昔のものを大事にして、そこから素晴らしいものが出来上がっていくのだなあ実感しました。

みんなとの思い出、楽しかったこと、オーストリアで学んだことはたくさんあります。歴史に残り続けている音楽家たち、建物、文化など日本と違うところがたくさんありました。日本の文化、オーストリアの文化はどちらも良い文化です。これからも世界の人達との交流を通して平和な世界へと繋がりたいです。

最後になりますが、一緒に行って助け合った友達、引率の先生方、オーストリア現地の方々、とても貴重で楽しい時間を過ごさせていただき、本当にありがとうございました。

Danke.



オーストリアで感じたこと

P.E.

私は海外派遣に行く前、派遣と一緒に参加する子たちと友達になれるか、オーストリアでの滞在中家族と離れることを考えるととても緊張していました。ですが、オーストリアに行って一日目からは緊張は解けました。なぜなら、一緒に参加した子たちと自然と仲良くなり、引率の先生たちのおかげで、不安がなく楽しく良い1週間を過ごせました。

私はオーストリアで感じたことが3つあります。

1つ目は、オーストリアの街並みです。オーストリアではどの街にもたくさんの音楽家の銅像がありました。日本には1つの街にたくさんの銅像がないのでとてもびっくりしました。

オーストリアの商店街みたいなどころでは、文字が読めない人のために看板でここがどんなお店が表現していました。それがすごく人思いな街だと思いました。

2つ目は研究テーマの食文化についてです。メイン料理でお肉が多く出ました。それらはとてもおいしかったです。特にウィナー・シュニッツェルがおいしかったです。夕食のデザートに出たザッハートルテもおいしかったです。オーストリアならではの食べ物をいっぱい食べることができとても良かったです。

3つ目はオーストリアの学校&生徒のことです。オーストリアの訪問した学校にはちゃんとした校庭がなく学校のルールなど日本と全然違いました。オーストリアの学校には携帯を持ってきて良いなどほとんどの学校には授業終わりの休み中に自分たちがもってきたお菓子を食べて良いなどのルールがありました。

また体育着もなく、自分の家から持ってきた動きやすい服装で体育の授業を受けていました。私は日本と全然違うルールでとてもびっくりしました。生徒のみなさんはとてもフレンドリーでした。みんなおしゃれで全体的に多様性がありました。

この海外派遣を通じて感じたこと、学んだことがいっぱいありました。コミュニケーションを取ることはとても大事だということを学びました。またたくさんの音楽家たちが活躍したことや美味しい食べ物、そして素敵な建物や街並み風景など魅力をたくさん知ることができました。

オーストリアに行くを決まる前まではこの名前しか知らなかったオーストリアですが、今回行ってみて大好きな国になりました。日本は独自の文化がある国です。私は日本の文化や歴史、環境への取り組みの勉強をして、今度は日本に来た外国人に日本文化を教える側もやってみたいです。

今回の海外派遣ではたくさんの人にお世話になりました。私はこの貴重な経験をこれからの人生に生かしていきたいです。ありがとうございました。



まるで別世界、オーストリア

M.R.

「馬車だ！お城だ！宮殿だ！」

私は、今回の海外派遣に出発する前、オーストリアのグルメを研究テーマにしていました。シュニッツェルやザッハトルテなど、食べ物はどれもおしゃれでおいしくて、特にデザートはかわいいものばかりでしたが、オーストリアで一番私の印象に残ったのは、馬車や石像、お城、宮殿、素敵な建物ばかりの街並みなど、まるでアニメや映画の世界のような美しい景色の数々でした。



まず、オーストリアに着いて最初に訪れたのはザルツブルクです。モーツァルトの生家では、モーツァルトが使っていた楽器や楽譜などを見ることができ、ランチはヨーロッパ最古と言われるレストランで食べました。岩山をくり抜いたとは思えない素敵なレストランで、料理は食器も盛り付けもおしゃれ。とてもおいしくて感動しました。ホーエンザルツブルク城は、ザルツブルク市の山の上にあるお城で、外は大きな壁に囲まれ、中には武器や楽器が展示されていました。特に城の外からザルツブルクの街全体を見ることができてとても素晴らしい景色でした。

3日目以降はウィーンで過ごしました。ベートーヴェン博物館では、実際に使われていたピアノや補聴器などを見ることができました。ウィーンで特に印象に残ったのはシェーンブルン宮殿です。建物や庭園がとても広く美しく、宮殿の中は天井一面に絵画が描かれ、大きなシャンデリアや壁などの飾りがとても素敵で感動しました。

そして、ウィーンではグルメや景色のほかにもう一つ心に残ったものがあります。それは、小学校の訪問です。オーストリアでは、ギムナジウムとミッテルシューレという2種類の学校があり、両方の学校へ行くことができました。ウィーンの生徒達の中には、日本語が書かれたTシャツや民族衣装を着て歓迎してくれた生徒もいて、一緒に音楽の授業を受けたり、折り紙を教えたりしました。そこで一番驚いたことは、まず、オーストリアの小学校は4年生までということ。そして、ギムナジウムを卒業した生徒は大学へ行き、ミッテルシューレの生徒の多くは仕事のための専門学校へ行くということを知りました。

私は、自分と同じ年の子供達が、すでに小学生ではなく、将来の進み方が決まっていることにとても驚きました。私の母は、いつも海外では子供の成長が早いと教えてくれていましたが、その理由の一つを知ることができたと感じ、私ももっと将来のことを考えたいと思いました。

私は、保育園の時から英語を習っていますが、今回の海外派遣でオーストリアの歴史や文化を学び、あらためて将来は海外で活躍する仕事をしたいと思いました。一緒に過ごした友達との思い出や刺激も忘れずに、これから沢山成長していきたいと思います。

オーストリアで感じたこと

Y.A.

僕が世田谷区の海外派遣研修に応募した理由は2つありました。

1つ目はオーストリアの子ども達との交流です。日本語がわからない人々と意思疎通ができれば面白いと思ったからです。実際に2回の学校訪問で生徒と話す機会がありました。英語で話そうとしてもなんといいのかわからなかったとき、彼らは何も言わずにしっかり聴こうとしてくれました。優しくフレンドリーなオーストリアの子ども達に感謝しながらジェスチャーを使って意思を伝え合うことができ、とてもうれしく思いました。言葉が通じない環境の中で自分の思いを伝えることができて達成感を持ちました。



2つ目はオーストリアの文化を知ることです。今回行ってきた場所の中で特に印象に残ったのは、ベートーベン博物館とシェーンブルン宮殿です。ベートーベン博物館は彼が住んでいた場所で、実際に使っていた補聴器を見ると顔の大きさほどもあり、ここまでしても耳が聞こえなくなってしまった彼のむなしさを実感しました。また、近くには教会があり1時間ごとに鐘がなっていました。この鐘の音が全く聞こえなくなったことに気づき初めて耳が聞こえなくなったことを実感したそうです。これらを知って僕は悲しい気持ちになりました。自分だったら心が折れてしまいそうなところを、それでもなおあきらめずに曲を作り続けたことが素晴らしいと思いました。シェーンブルン宮殿はハプスブルク家が夏の宮殿として使っていた場所です。宮殿内はいたるところに金が使われ、遠いアジアの文化であるうるしが使われている部屋もあり、手間やお金がかかっただろうと思いました。当時2億円ほどの建設費用だったそうです。また、外の庭はたくさんの花で彩られておりとても広く美しかったです。これだけの宮殿を造ることができるハプスブルク家に驚きました。

僕たちは一人一つの研究テーマをもってオーストリアに行きました。僕のテーマは「オーストリアと日本の夏休み、生活の違い」でした。夏休みは6月～9月と長いのでどこかへ出かけてしまう人が多く、夏休みが始まる週を一週間ずつずらして交通手段が混み合わないようになっています。日本と比べると2か月ほども長いことに驚き、うらやましく思いました。現地の子どもやドゥブリング区の区長は日本人に好意的で、区長は僕たちの質問に一つずつ丁寧に答えてくださいました。僕は「気温が低くても薄着の子が多いが寒くないのか」と「子ども達はどんな遊びが好きか」という質問をしました。寒さには慣れているので大丈夫、子ども達が好きな遊びはサッカーや野球などです、と仰っていました。スキーなどの雪国で行われる遊びが人気かと思っていましたが、日本の子ども達と変わらないのは意外でした。

このように海外派遣でたくさんの経験をすることができました。これらの経験を将来に活かしていきたいと思います。お世話になった方々、ありがとうございました。

オーストリアの遊び・スポーツから感じたこと

Y.A.

将来、日本のことを世界に伝える作家になりたいです。そのためにも、まずはオーストリアの特徴を実際に自分の目で確かめたいと考え、この海外派遣プログラムに応募しました。その国を知るために、まずは身近な遊びやスポーツを調べるのが良いと考え、研究テーマは「オーストリアの遊び・スポーツについて」にしました。

私がオーストリアに行って気が付いたことは主に二つあります。一つ目は、オーストリアの人々は気候に合ったスポーツをしているということです。オーストリアは寒い時期が多い気候であるため、スキーやサッカーが親しまれていました。日本の北海道や東北・北陸と同じような気候だと知りました。日本と同じようなスポーツが親しまれていて、とてもうれしく思いました。私は、小さい頃、新潟県でスキーをしたことがあります。次は、オーストリアでスキーにチャレンジしたくなりました。



二つ目は、日本の遊びが知られていたということです。4日目と6日目の学校訪問で、折り紙の鶴と手裏剣の折り方を教えました。手裏剣を折っていると、スマホの翻訳機能で、「私、折り紙知ってるよ。」と伝えてくれた子がいて、とても驚きました。他にも、「手裏剣は知らないが、鶴は知ってるよ。」と言われて、日本の文化の広がりを感じました。

このような体験を通して、日本の遊びで知られている点があること、スポーツについて共通点や相違点がたくさんある事を知りました。ほかの国ではどうなんだろうと、ますます興味がわいてきました。これからも海外にたくさん行って、日本との共通点や相違点を実際に感じたいと思います。

この研修を通して、改めて世界の広さを感じました。これまでに、トルコに行ったことがあり、オーストリアも大体同じ感じなのかと思っていました。しかし、実際に行ってみると街並み、雰囲気、人々の生活など、トルコとは全然違う事にとっても驚きました。実際に体験してみることの大切さを知りました。中学生になったら海外留学に行きたいと思います。

そして、今回、オーストリアの人々から見習いたいことがあります。それは、とてもおおらかで前向きなところです。学校訪問の時に、英語もドイツ語も喋れない私たちを笑顔で迎えてくれました。複雑な折り紙にも、私たちのジェスチャーを見ながら真剣に取り組んでくれました。途中、私たちが上手く教えられなくて、失敗してしまうことがあっても、せかさず、ずっと待っていてくれました。それに比べて最近の日本の人々はせっかちだと思います。この前も、少し信号の待ちが長かっただけなのに「早く行けよ！もういけるだろ！」とクラクションを鳴らしながら怒鳴っている人を見かけて、悲しい気持ちになりました。オーストリアの人たちのおおらかさや何にでも前向きな姿勢を見習いたいです。

海外派遣を経験して

Y.Y.

海外派遣に参加することで作文に収まりきらないほどのたくさんの感動を体験することができました。短い期間で私が接したオーストリアという都市の文化、暮らし、人、食の全てがとても印象的なものでした。

まず、今回の研究テーマであるオーストリアのリサイクル事情については、ウィーン市内の道路には、リサイクル用の回収ボックスが700m 間隔で設置されていることにとっても驚きました。回収ボックスが街の景色を崩さずに、すぐに手の届く場所で当たり前のようにくらしに溶けこんでいる点は日本との大きな違いだと思います。瓶は色別で分けられており、ゴミではなく「資源」として再利用される様子を頭の中ですぐにイメージする事ができました。限られた資源を大切に利用することの重要性を改めて感じることができました。



次に、音楽の都と呼ばれているウィーンです。海外派遣に行く前はウィーンに芸術家が集まっている理由がわかりませんでした。実際に自分の目で見て、その理由がわかりました。ハプスブルク帝国時代につくられたシェーンブルン宮殿で当時の貴族のくらしや、競い合って宮廷楽団が演奏している様子を想像し、文化や芸術が栄えたウィーンで自分も将来の作家を目指して勉強したいと思うようになりました。残念ながら私が好きな画家であるエゴン・シーレの作品を見ることはできなかったのですが、ウィーンという街の美しさや、250 年以上かけて収集されたコレクションを所蔵する自然史博物館やシェーンブルン宮殿を見学し、たくさんの刺激を受けることができました。

滞在中に、二度の学校訪問も経験する事ができました。ウィーンの子どもたちは、皆自分から名前を教え合い、私たち派遣団と友達になろうとしてくれ、とても親しみやすくフレンドリーだったことに驚きました。私も転校生や見知らぬ人でも彼らのように自分から積極的に関わっていき、国内外を問わずたくさんの友達を作っていきたいと思います。学校では音楽の先生がとてもユニークな方で生徒の声がよく出ると歌う前に皆で思いっきり声をあげるように指導する様子があり、自分も一緒に活動に参加することで幸せな時間を過ごすことができました。

滞在中は、世田谷区の派遣団のメンバーとなかよくなることができました。皆でウィーンの代表的な食べ物のチョコレートケーキであるザッハトルテや牛肉のカツレツに似たウィンナーシュニッツェルなどを頂いたことも思い出のひとつになりました。

滞在中は、世田谷区の派遣団のメンバーとなかよくなることができました。皆でウィーンの代表的な食べ物のチョコレートケーキであるザッハトルテや牛肉のカツレツに似たウィンナーシュニッツェルなどを頂いたことも思い出のひとつになりました。

今回の海外派遣に参加することで、これまで見たことも経験したこともないことに触れることができ、私の人生や将来の夢を変える素晴らしいきっかけになりました。私は、この海外派遣に参加できたことを誇りに思います。今度は留学というかたちでウィーンに行き、作家という視点で学びに行きたいと思っています。

「今しかない」をやらなくちゃ

オーストリア派遣団引率 桜小学校 主任教諭 桜小学校 堀江 温子

私は、面接の時からこの事業で2つのことを実行しようと決めていました。一つは、「今しかない」その一瞬に、一步踏み出せるよう子供の背中を押すこと、もう一つは私自身が「今しかない」チャンスに飛び込み、子供達に交流の機会を繋げることです。ですから、交流校などでスペイン語圏の人がいたら話しかけよう、そう決めていました。片言でも、可能な限りの言語を使って交流のチャンスを作り、チャレンジは誰にでもできる事を知ってほしいと考えていました。

なぜそのようなテーマをもったかという、自らの3年間のスペイン語圏での海外生活の中で、「自分から飛び込むことでしかコミュニケーションの体験は得られない」「その国の言語で話せば、たとえ単語でも人々はとても喜んで接してくれる」事を学んだからです。

この旅は、ガイドさん、通訳さんに大変お世話になりました。始めはぎこちなかった子供達も、旅の途中から、お二人に頼らずに自分から「ダンケシェーン」「ビッテシェーン」と声をかけていました。学校訪問・市長訪問でも、「自分で声をかけてごらん」「研究テーマについて質問してごらん」と声をかけると、子供達は戸惑いの表情を一瞬で振りきり、文字通り羽が生えたように飛び出して行きました。その他にも、子供達には、レストランで会った方にスペイン語で挨拶したり、ストリートピアノに背中を押したり、メキシコ人ご家族の子供に折り紙を折って渡してもらったりしました。私自身も、市長室にあった和太鼓を見て「今だ!」と演奏を披露したり（ドキドキした!）、ストリートピアノを弾いたり（手が震えた!）、今しかできない事に勇気を出して取り組みました。子供達への「今しかない」の後押しもできたと思います。子供達も、よく勇気をもって飛び込んだと思います。

それは、決めたことを踏襲するのではなく、臨機応変に対応することをよしとするオーストリアの風土や、オーストリアの壮大な歴史や建造物、大地を体感していたからかも知れません。

オーストリアは素晴らしい国でした。歴史の中にある光と影、人々の考え方、環境に配慮するためにあえて効率をとらない考え方、移民との共存や教育。たくさんのことをガイドの中村さん、通訳のラートさんから学びました。これは、観光ではなく、国際交流だったからこそ得られたものだと思います。私は、ラートさんがおっしゃっていた言葉をこれからの子供達に送り続けたいと思います。

「日本人は“ヨーロッパは進んでいる”という言い方をして、日本を低く見がちですが、それは違います。オーストリアは臨機応変で対応するよさがあるが、場合によってルーズとも言える。日本人にはきちんと決めるよさがあるが、場合によって堅苦しいとも言える。どちらが良いということではなく、どちらのよさも認めて、受け入れていく。そんな風に考えられる人になってください。」



和太鼓ポーズの区長と私

「オーストリア」で一致団結！

楽しく学ぶ姿勢を大切にしよう！

オーストリア派遣団引率 上北沢小学校 主任教諭 原口 美津紀

世田谷区の姉妹都市であるオーストリア、ウィーン市のドゥブリングとザルツブルクへの訪問を行いました。今年で姉妹都市提携 40 周年という節目の大切な年に、派遣団の引率教員として参加させていただきました。

派遣団の子どもたちと初めて会ったのは 6 月のことでした。表情は固く、どうにか緊張をほぐし、安心して学べる環境を 1 日も早く整えたい！と感じたことを今でも覚えています。すぐに私の名前を覚えてくれ、素直な子どもたちの姿に安心しました。私は参加児童と同じ 5 年生の担任ということもあり、不安や緊張はあまりなく、子どもたちが安心して、オーストリア派遣団に参加できるように尽くしたいという気持ちで臨みました。10 月までの月 1 回の学習会では、この派遣を通して学びたいことや個人のテーマを考え、決定しました。また、インターネットなどでは知ることのできない体験や経験、学習ができるように学習会を計画しました。こちらだけが学び得るのではなく、日本の文化を伝えるために、「もみじ」やオーストリアで生まれた「歓喜の歌」を練習しました。披露する場所にピアノや楽器が必ずあるわけではないので、リコーダーや鍵盤ハーモニカ、ヴェノーヴァで前奏の演奏ができるように練習をしました。歌ったり演奏をしたりすることが好きな子どもたちが多く、出発式での美しい歌声に安心し、オーストリアで披露するのが楽しみになりました。



Maria Regina AHS ギムナジウムへの学校訪問では、音楽の授業に参加させていただきました。「喜びの歌」をドイツ語で現地の児童と一緒に歌う姿は、言葉が通じなくてもオーストリアと日本の子どもたちが一つになった姿に感動しました。オーストリアの方々や世田谷区長や議会団の方々も感動されている表情が見られ、胸が熱くなりました。長年、ガイドと通訳してくださっているラートさんが「素晴らしい！」と言ってくださったとき、涙が溢れました。また、折り紙と一緒に織る姿も、ただ教えるだけではなく、うまく伝わらない中にも試行錯誤しながら教える懸命な表情も印象的でした。子どもたちの力に、改めて気付かされました。

ザルツブルクのミラベル公園・ペーター教会・音楽祭広場では、映画「サウンドオブミュージック」の世界にたくさん触れることができました。モーツァルト生家・レジデンツ広場・ホーエンザルツブルク城、ウィーン市内のシェーブルン宮殿・ウィーンの森では、日本では感じるることのできない迫力がある美しさに触れました。まだ、学習の中で「歴史」に触れていない子どもたちですが、今後「日本史」や「世界史」「世界地理」を学習する中で、今回見たり聞いたりしたことがきっと糧になるのではないかと思います。

区長表敬訪問では、ウィーンや区内のことをたくさん伺うことができました。自分の研究テーマに沿った質問ができた子も多く、学びの多い時間になりました。

今回、引率として参加させていただき、派遣事業を通して学んだことをこれから出会う子どもたちに伝え、今後の教育活動に生かしていきたいと思っています。16 名で一致団結し、多くのことを楽しく学ぶことを大切にできた 6 泊 7 日でした。かけがえのない、学びの日々をありがとうございました！！

海外派遣事業の経験と学び

オーストリア団引率 教育指導課指導管理係 小池 直輝

オーストリアのウィーン市ドゥプリング区との姉妹都市40周年という節目の年に、この海外派遣事業に携わらせていただきました。

私は、今年度新規採用として、世田谷区教育委員会へ配属となりました。そして、10月1日に本採用となり、この海外派遣事業が私自身初めての大きな仕事でした。そのため、引率の先生方にご迷惑をおかけしないか、児童たちをしっかりとサポートできるか、上手く関係性を築けるかなど不安でした。しかし、実際に派遣が始まると、すぐに児童たちの方から距離を縮めてくれ、1つ不安がなくなったのと同時に最後までやり遂げなければならないと思わせられました。



私自身、海外へ行くのは、3月の卒業旅行以来2度目です。その時は、まさかこんなに早く、また海外へ行くことになるとは考えもしなかったのですが、今回は友人と行く旅行とは全く異なり、仕事です。ですが、ミュンヘン空港へ向かう飛行機でオーロラを見たときは、はしゃぎました。児童たちと飛行機の小さい窓から上手く写真を撮ろうと頑張ったのは良い思い出です。

この派遣事業では、姉妹都市交流を目的として学校訪問や区長表敬を行います。今回、引率をさせていただいて、一番印象に残ったことは、学校訪問と区長表敬での児童たちの姿です。学校訪問では、現地の児童に折り紙を教える時間があり、言葉が通じない中でも一生懸命に折り方を伝え、完成した作品を褒め合う姿が印象的でした。私はカメラ担当だったのですが、つい写真を撮りすぎてしまったような気がします。また、現地の児童たちと一緒にドイツ語で「よろこびの歌」を歌う姿には感動しました。一方、区長表敬での区長への質問タイムでは、ここまで様々な場所を巡り、疑問に感じたことや自分たちが考えてきた研究テーマを時間いっぱい質問していました。児童たちが積極的に質問し、自ら学ぶ場を作っていただいたドゥプリング区のレッシュ区長には、感謝です。

オーストリアは、準備をそれほどしません。現地での添乗員さんがおっしゃっていましたが、オーストリアでは、いざ社会科見学へ行ったら閉業日なんてこともあるようです。準備を入念に行う日本とは大きく異なる価値観ですが、学校訪問等で実際に交流をする中で世界には様々な価値観があるということを感じることができたのではないかと思います。私が8カ月前に初めて肌で感じたことを小学生で感じられるなんて、羨ましいなと、少し、思いました。

今回、この海外派遣事業のために動いてくださった皆様、心から感謝申し上げます。その中でも、特に、右も左もわからない新人を受け入れてくださった団長と先生方、日本で夜中でも連絡を取り続けてくださった野嶋係長と細川さん、そして、子供と関わるのは楽しいと初めて思わせてくれた16人の児童たちには、深くお礼申し上げます。とても貴重で素晴らしい経験をありがとうございました。

令和 6 年度

第 31 回世田谷区小学生海外派遣事業報告書

(オーストラリア・オーストラリア)

発行年月	令和 7 年 2 月
発 行 者	世田谷区教育委員会事務局教育指導課
所 在 地	世田谷区世田谷 4-21-27
電話番号	03 (5432) 2706